

上 園 遺 跡 11

— 第17次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第205集

2 0 2 3

大 野 城 市

かみの その
上 園 遺 跡 11

— 第17次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第205集



2023

大 野 城 市

序

大野城市は福岡平野の南部に位置し、西暦 665 年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城跡」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた街です。

上園遺跡は市域のほぼ中央に位置し、国指定史跡である牛頸須恵器窯跡の北側の一角にあたります。これまで 16 回にわたる発掘調査が行われ、古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡が確認されました。

今回報告する調査地では、主に古墳時代の住居跡が見つかりました。住居からは須恵器が大量に出土し、焼き歪んだ失敗品も含まれていることから、生産された須恵器の選別等が行われた可能性が考えられます。牛頸窯跡群開窯期における須恵器工人たちの活動を明らかにするうえで、重要な成果となりました。

本書が学術研究はもとより、地域の歴史や文化財の理解と認識を深める一助となり広く活用されることを願ってやみません。

最後になりますが、発掘調査ならびに報告書作成にあたり多大なるご指導を賜りました関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和 5 年 3 月 31 日

大野城心のふるさと館

館長 赤司 善彦

例 言

1. 本書は、大野城市上大利4丁目118番1に所在する上園遺跡第17次発掘調査の成果についての報告書である。
2. 調査は個人の委託を受け、大野城市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は山元瞭平が担当した。
4. 遺構実測は山元、齋藤明日香、澤田康夫が行った。
5. 遺構写真は山元が撮影した。
6. 遺物写真は(株)写測エンジニアリングに委託し、牛嶋 茂が撮影した。
7. 遺物実測は山元、小畑貴子、古賀栄子、小嶋のり子、篠田千恵子、白井典子、津田りえ、仲村美幸、氷室優、松本友里江が行った。
8. 遺物拓本は小畑、篠田が行った。
9. 遺構図製図・遺物図製図は小嶋が行った。
10. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修）を使用した。
11. 本書図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標（第Ⅱ系）による。
12. 本書の第2図は、国土交通省国土地理院発行の25,000分の1地形図『福岡南部』・『不入道』を使用した。
13. 遺物の名称のうち、須恵器蓋杯については奈良文化財研究所による呼称を用いる。
14. 出土遺物・実測図・写真は、大野城市が保管・管理している。
15. 本書の執筆および編集は山元が行った。
16. 遺物の整理に関しては、京都府立大学の菱田哲郎氏にご指導を賜った。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査経過	1
3. 調査体制	1
II. 位置と環境	
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	4
III. 調査の成果	
1. 調査の概要	6
2. 遺構と遺物	6
IV. 総括	
1. 遺跡の位置付け	31
2. 平行文当て具痕を有する須恵器杯類について	33
3. 須恵器椀について	35
V. 附編	
1. 野添12号窯跡出土資料の紹介	36

挿図目次

第1図 調査地位置図 (1/3,000)	3
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	5
第3図 遺構配置図 (1/150)	6
第4図 SC01実測図 (1/60)	7
第5図 SC01出土遺物実測図① (1/3)	8
第6図 SC01出土遺物実測図② (25～28は1/2、その他は1/3)	9
第7図 SC02実測図 (1/60)	10
第8図 SC02出土遺物実測図 (38のみ1/2、その他は1/3)	11
第9図 SC03実測図 (1/60)	12
第10図 SC03出土遺物実測図 (44・45は1/2、その他は1/3)	12
第11図 SC04実測図 (1/60)	13
第12図 SC04出土遺物実測図 (1/3)	14
第13図 SC05実測図 (1/60)	16
第14図 SC05出土遺物実測図① (1/3)	17
第15図 SC05出土遺物実測図② (76は1/4、77は1/6、その他は1/3)	18

第16図	SC06実測図（1/60）	19
第17図	SC06出土遺物実測図①（1/3）	20
第18図	SC06出土遺物実測図②（101・102は1/2、その他は1/3）	21
第19図	SC07実測図（1/60）	22
第20図	SC07出土遺物実測図（1/3）	22
第21図	SK01・03・04・07実測図（1/30）	23
第22図	SK01・03・07・SP27出土遺物実測図（1/3）	23
第23図	SK04出土遺物実測図（1/3）	25
第24図	SC04～06一段下げ・表土剥ぎ出土遺物実測図 （155・157は1/2、その他は1/3）	26
第25図	SK04出土供膳具法量分布図	31
第26図	竪穴建物出土土器比率図	32
第27図	牛頸窯跡群における須恵器碗の変遷（1/6）	35
第28図	野添12号窯跡出土遺物実測図（1/3）	36

表 目 次

第1表	遺物観察表①	27
第2表	遺物観察表②	28
第3表	遺物観察表③	29
第4表	遺物観察表④	30
第5表	平行文当て具痕を有する須恵器杯類一覧	34

図 版 目 次

図版1	(1) 調査区全景（北東から） (2) 調査区俯瞰（上が北）
図版2	(1) SC01全景（東から） (2) SC01南北土層（西から） (3) SC01貼床南北土層（西から） (4) SC01カマド土層（西から） (5) SC01カマド完掘状況（南東から）
図版3	(1) SC02全景（東から） (2) SC02東西土層（南東から） (3) SC02カマド土層①（南西から） (4) SC02カマド土層②（南東から）

- (5) SC02カマド完掘状況（東から）
- 図版4 (1) SC02貼床除去状況（東から）
 - (2) SC03全景（東から）
 - (3) SC03東西土層（南から）
 - (4) SC04全景（南東から）
 - (5) SC04南北土層（西から）
 - (6) SC04カマド土層（東から）
 - (7) SC05全景（南東から）
 - (8) SC05土層（南東から）
- 図版5 (1) SC06全景（南西から）
 - (2) SC06東西土層（南西から）
 - (3) SC06カマド土層①（南東から）
 - (4) SC06カマド土層②（南西から）
 - (5) SC06カマド遺物出土状況①（東から）
- 図版6 (1) SC06カマド遺物出土状況②（東から）
 - (2) SC06貼床除去状況（南西から）
 - (3) SC07全景（東から）
 - (4) SK01全景（北西から）
 - (5) SK04遺物出土状況①（南西から）
 - (6) SK04遺物出土状況②（南西から）
 - (7) SK04調査状況（南東から）
 - (8) 調査前全景（北西から）
- 図版7 出土遺物①
- 図版8 出土遺物②
- 図版9 出土遺物③
- 図版10 出土遺物④

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

上園遺跡は、福岡県大野城市上大利3・4丁目を中心に広がる古墳時代から中世にかけての集落遺跡である。1985年以降、16回にわたる発掘調査が実施されている。

本報告の調査地は上大利4丁目118番1で、周知の埋蔵文化財包蔵地「上園遺跡」の範囲内に当たる。埋蔵文化財の照会を受け、令和3(2021)年3月19日に確認調査を実施したところ、現地表面から約50cmの深さで遺構を確認した。

事業者は当該地に6棟の戸建住宅を建設する予定であり、敷地中央に道路を設置する計画であった。宅地部分は保護層が確保できるものの、道路部分は恒久的構築物であることから、発掘調査が必要と判断された。事業者からの計画予定図面を添えて93条に基づく届出を福岡県教育庁あてに提出し、令和3年12月28日付で発掘調査の指示が出された。また、令和3年12月14日付で埋蔵文化財発掘調査の依頼書・承諾書が提出された。

これを受け、令和4(2022)年1月21日から同年3月30日にかけて発掘調査を実施した。調査対象面積は160㎡である。整理作業は、令和4年度に実施した。なお、発掘調査および整理作業に関する費用は、事業者が全額負担した。多大なるご理解とご協力をいただいた吉嗣波津子氏には記して感謝の意を申し上げたい。

2. 調査経過

発掘調査は、令和4年1月21日から開始した。はじめに重機による表土剥ぎを行い、2月1日から作業員による遺構の検出・掘削を開始した。調査区南側は、住居跡の重複が著しく、先後関係の把握に時間を要した。3月上旬には概ね遺構の掘削が完了し、3月16日にドローンによる空中写真撮影を実施した。その後、住居貼床の断ち割り等の追加調査を行い、図面・写真の記録作成を行った。3月28日から重機による埋め戻しを開始し、3月30日に完了した。同日に機材等もすべて撤収し、調査を完了とした。

3. 調査体制

令和3年度から令和4年度における発掘調査および整理体制は以下のとおりである。

令和3年度（発掘調査）

教育長	吉富 修（～6月）	伊藤 啓二（6月～）
教育部長	日野 和弘	
ふるさと文化財課長	石木 秀啓	
啓発整備担当係長	林 潤也	
主査	徳本 洋一	
主任主事	秋穂 敏明	

主事	鮫島 由佳
会計年度任用職員（啓発）	山村 智子 深町 美佳
会計年度任用職員（庶務）	三好 りさ 光原 乃里子（～9月） 荒牧 美佐子（10月） 野上 知則（11月～）
発掘調査担当係長	上田 龍児
主任技師	山元 瞭平
技師	齋藤 明日香
会計年度任用職員（調査）	澤田 康夫 石川 健（12月～）
会計年度任用職員（発掘作業）	舩越 桃子 深野 人美 大藪 英美 仲前 富美子 井口 るみ子 佐々田 薫 瀧口 松夫 大津 幸男 永田 眞知子 安倍 五郎 松田 紀雄 横野 茂樹 夙 一文
会計年度任用職員（事務補助）	山上 敬子 井之口 彩子

令和4年度（整理作業）

市長	井本 宗司
地域創造部長	増山 竜彦
大野城市心のふるさと館	
館長	赤司 善彦
文化財担当 課長	石木 秀啓
係長	林 潤也 上田 龍児
主査	徳本 洋一
主任主事	秋穂 敏明
主任技師	山元 瞭平
技師	齋藤 明日香
会計年度任用職員	澤田 康夫 石川 健 山村 智子 深町 美佳 照屋 真澄（8月～） 小川 久典（～6月） 清水 康彰 大塚 健三（7月～）
会計年度任用職員（整理作業）	白井 典子 仲村 美幸 小嶋 のり子 松本 友里江 津田 りえ 氷室 優 古賀 栄子 篠田 千恵子 小畑 貴子
会計年度任用職員（事務補助）	山上 敬子 井之口 彩子



第1図 調査地位置図 (1/3,000)

Ⅱ．位置と環境

1．地理的環境

大野城市は福岡平野の南部に位置し、南北に細長く中央部がくびれた形を呈する。市域の南側には、牛頸山とそれから派生する低丘陵が広がる。牛頸山は、背振山系の一角をなし、地盤は早良型花崗岩に属し、表層は風化が激しい真砂土となっている。牛頸山北麓から北側低丘陵にかけては、御笠川の支流である牛頸川と、牛頸川の支流である平野川の開析作用によって無数の谷がつけられ、複雑な地形を形成している。上園遺跡は、市域のほぼ中央に位置し、南部の牛頸山から北側に派生する丘陵に挟まれた平地部に立地する。

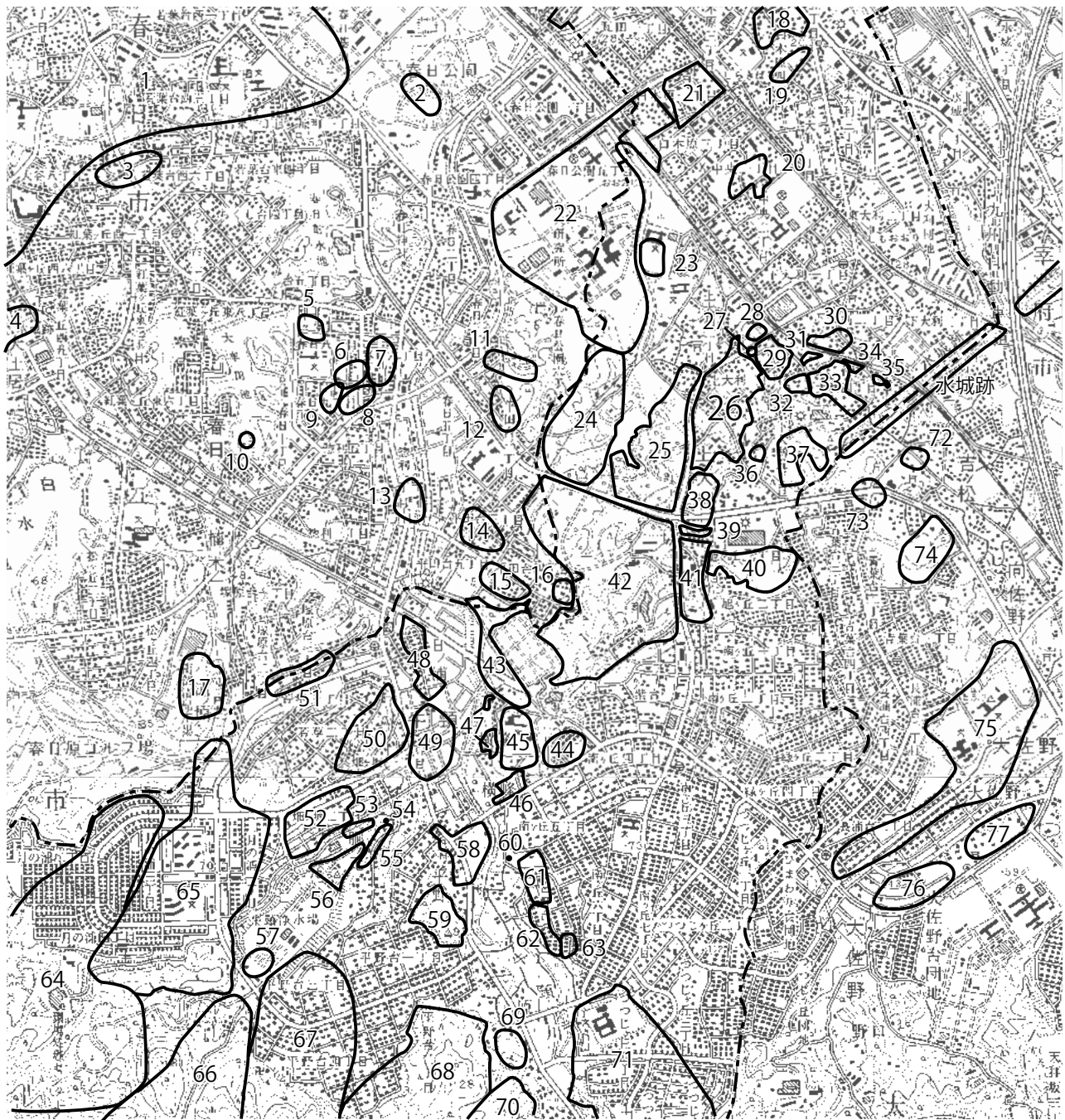
2．歴史的環境

上園遺跡の所在する大野城市南部の牛頸山北麓周辺では、旧石器時代から近世にいたるまでの遺跡が確認されている。ここでは、古墳時代以降の周辺遺跡を概観する。

大野城市南部では、6世紀以降に遺跡数が増加する。6世紀中頃には、九州最大の須恵器窯跡である牛頸窯跡群の操業が開始される。6世紀末から7世紀前半になると、窯の基数が大幅に増加し、牛頸窯跡群特有の「多孔式煙道」が登場する。また、小田浦窯跡群や月ノ浦窯跡は瓦陶兼業窯で、生産された瓦は那津官家と目される福岡市那珂遺跡群へ供給されている。集落は、塚原遺跡群、日ノ浦遺跡、上園遺跡などがあげられる。上園遺跡では、後期の竪穴建物や掘立柱建物、ロクロピットが確認されたことから、須恵器工人集落と考えられる。古墳は、後田古墳群、小田浦古墳群、塚原古墳群などがあげられる。特殊な事例として、梅頭遺跡群において、廃窯後に「墓」として転用されたものが確認されており、窯内から鉄刀や鉄鏃、耳環などの副葬品が出土している。7世紀後半には窯の数が一時的に減少し、多孔式煙道窯から直立煙道窯へ変化するなど、生産の変革期に当たる。

奈良時代には牛頸窯跡群の操業が最盛期を迎える。ハセムシ窯跡群や井手窯跡群では、大小の窯を使い分けており、大型の窯では大甕、小型の窯では食器類の生産が行われた。特徴的な遺物として、調納を示すヘラ書きが施された大甕が出土している。当該期の集落は、本堂遺跡や塚原遺跡群、日ノ浦遺跡などがあげられる。本堂遺跡では、円面硯や転用硯、墨書土器などが出土しており、寺の存在が想定される。塚原遺跡群では、竪穴建物や土坑、廃棄土坑などが確認され、廃棄土坑には須恵器が一括して廃棄されていた。日ノ浦遺跡では、竪穴建物や土坑、廃棄土坑が確認された。

平安時代に入ると遺跡数は減少し、牛頸窯跡群も9世紀中頃に操業を停止する。当該期の遺跡は、本堂遺跡や上園遺跡、小水城周辺遺跡などが該当する。本堂遺跡では10世紀以降に遺構が増加し、掘立柱建物や溝などが確認されている。また、谷部からは墨書土器や呪符木簡など、祭祀遺物が多く出土している。上園遺跡では、掘立柱建物や井戸のほか、集落を区画する溝が確認されている。また、これらの遺跡が所在する上大利地区一帯からは焼き歪んだ瓦器や窯道具とみられる棒状土製品が数多く出土しており、瓦器生産に関わる遺跡としても注目される。



【春日市】

- | | | | | | | |
|-------------|-------------|------------|-----------|-----------|----------|------------|
| 1. 須玖遺跡群 | 2. 春日公園内遺跡 | 3. 小倉水城跡 | 4. 大土居水城跡 | 5. 惣利窯跡群 | 6. 惣利遺跡 | 7. 惣利北遺跡 |
| 8. 惣利東遺跡 | 9. 惣利西遺跡 | 10. 大牟田窯跡 | 11. 向谷北遺跡 | 12. 平田北遺跡 | 13. 円入遺跡 | 14. 春日平田遺跡 |
| 15. 春日平田西遺跡 | 16. 春日平田東遺跡 | 17. 浦ノ原窯跡群 | | | | |

【大野城市】

- | | | | | | | |
|----------------|-------------|-----------|-----------|----------------------------|---------------|--------------|
| 18. 原ノ畑遺跡 | 19. 大道端遺跡 | 20. ハザゴ遺跡 | 21. 後原遺跡 | 22. 御供田遺跡 (九州大学筑紫キャンパス遺跡群) | | |
| 23. 池田・池ノ上遺跡 | 24. 梅頭遺跡群 | 25. 本堂遺跡 | 26. 上園遺跡 | 27. 下大利廃寺 | 28 (33). 谷川遺跡 | 29. 永福遺跡 |
| 30. 向川路遺跡 | 31. 末次遺跡 | 32. 天神田遺跡 | 34. 唐土遺跡 | 35. 父子嶋遺跡 | 36. 出口遺跡 | 37. 矢倉遺跡 |
| 38. 小水城周辺遺跡 | 39. 上大利小水城跡 | 40. 谷蟹遺跡群 | 41. 野添遺跡 | 42. 野添窯跡群 | 43. 花無尾遺跡 | 44. 平田1・2号窯跡 |
| 45. 横峰Ⅰ遺跡 | 46. 横峰Ⅱ遺跡 | 47. 屏風田遺跡 | 48. 日ノ浦遺跡 | 49. 塚原遺跡群 | 50. 畑ヶ坂遺跡 | 51. 下ノ原遺跡 |
| 52. 月ノ浦遺跡 | 53. 正楽寺跡 | 54. 胴ノ元古墳 | 55. 胴ノ元窯跡 | 56. 胴ノ元遺跡 | 57. 大行事遺跡 | 58. 平野遺跡 |
| 59. 城ノ山窯跡・不動城跡 | 60. 中通古墳 | 61. 中通遺跡 | 62. 中通古墳群 | 63. 中通窯跡群 | 64. 後田窯跡群 | 65. 小田浦窯跡群 |
| 66. 石坂窯跡群 | 67. 大谷窯跡群 | 68. 原浦窯跡群 | 69. 原窯跡 | 70. 井手窯跡群 | 71. ハセムシ窯跡群 | |

【太宰府市】

- | | | | | | |
|----------|-----------|----------|-----------|-----------|-----------|
| 72. 島本遺跡 | 73. 神ノ前遺跡 | 74. 篠振遺跡 | 75. 宮ノ本遺跡 | 76. カヤノ遺跡 | 77. 京ノ尾遺跡 |
|----------|-----------|----------|-----------|-----------|-----------|

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

Ⅲ. 調査の成果

1. 調査の概要

上園遺跡は、牛頸川の支流である平野川が形成した沖積地上に位置する。これまで16次におよぶ調査を実施し、古墳時代から中世にかけての集落跡が確認されている。

調査対象地は標高30m前後の平坦な土地で、調査前は水田として利用されていた。遺構面は、耕作土（50cm）を除去した後確認した。砂質土を基本とし、部分的に粘質土の堆積が認められる。

調査の結果、竪穴建物7軒・土坑8基・複数のピットを確認し、須恵器・土師器・土製品・石製品・鉄製品が出土した。

2. 遺構と遺物

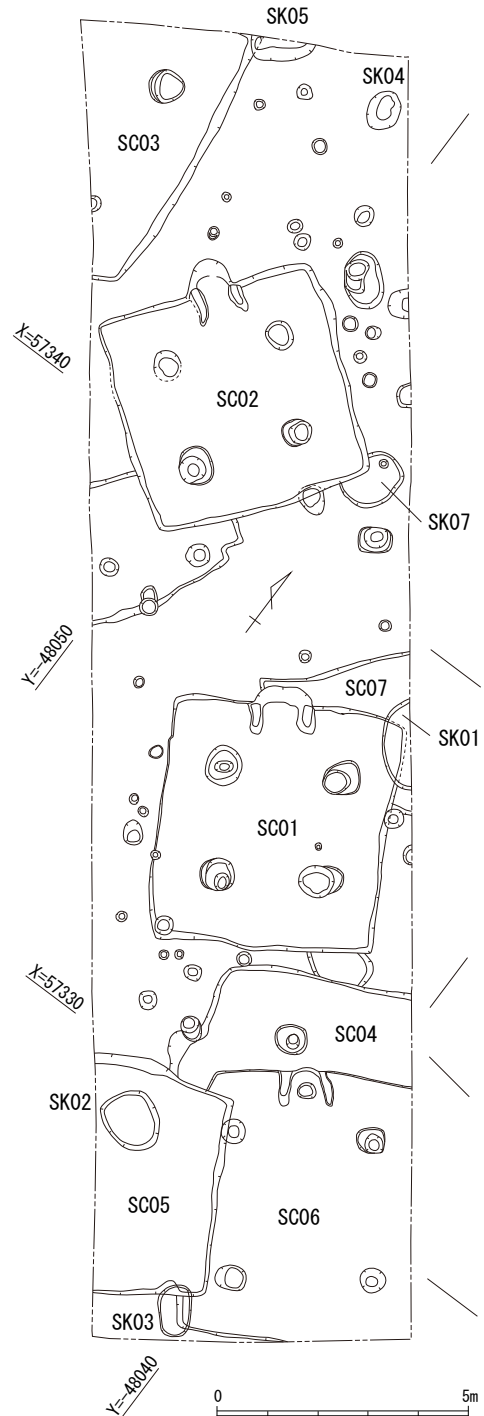
(1) 竪穴建物

SC01（第4図、図版2）

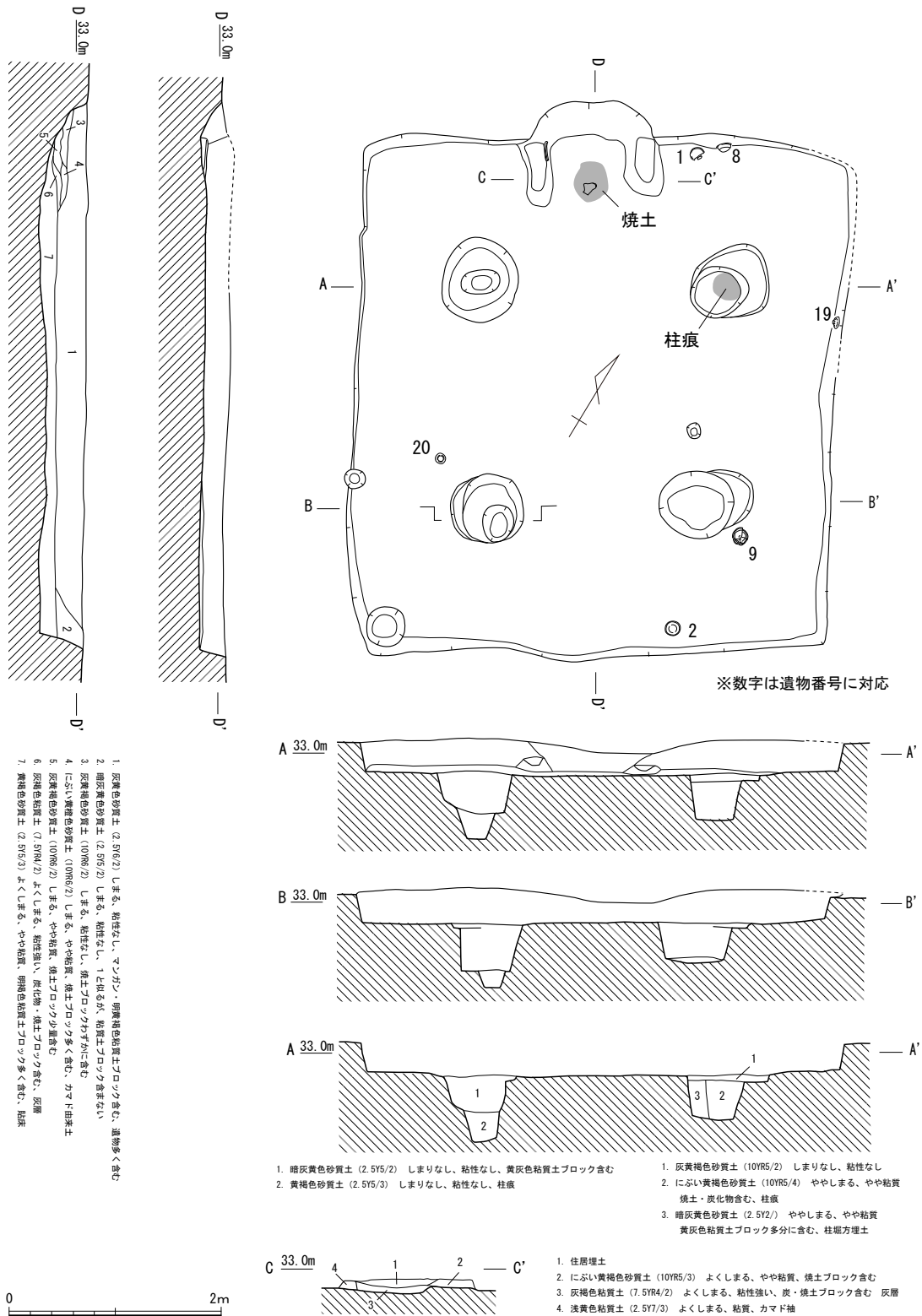
調査区中央に位置し、東壁をSK01に切られる。平面略方形で、北壁で4.6m、西壁で4.8m、最深部で30cmを測る。床面はほぼ平坦で、10～15cmの厚さで貼床を検出した。北壁中央に浅黄色粘質土でカマドを構築し、袖は高さ15cmほど残存する。カマド袖は北壁から屋内に60cmほど突出し、両袖間は床面で70cmを測る。カマド内部の床面上には灰層と考えられる灰褐色粘質土が堆積し、その上に黄褐色の焼土層が形成される。焼土層は被熱し、上面が硬化していた。また、カマド西袖には須恵器甕の胴部片が貼り付いており、カマド袖の補強に使われたとみられる。煙道側は壁外へ30cm突出している。支柱穴は4基で、平面円形あるいは楕円形を呈し、直径60～80cm、深さ40～60cmを測る。一部の柱穴は2段掘りである。カマド周辺からは須恵器蓋杯が複数個、住居壁面に立てかけられたような状態で出土した。

出土遺物（第5・6図、図版7）

須恵器（1～26）1～6は杯H蓋。口径は13.3～14.0cmを測る。3は天井部が丸みを帯び、その他の天井部は平坦である。いずれも天井部は回転ヘラ

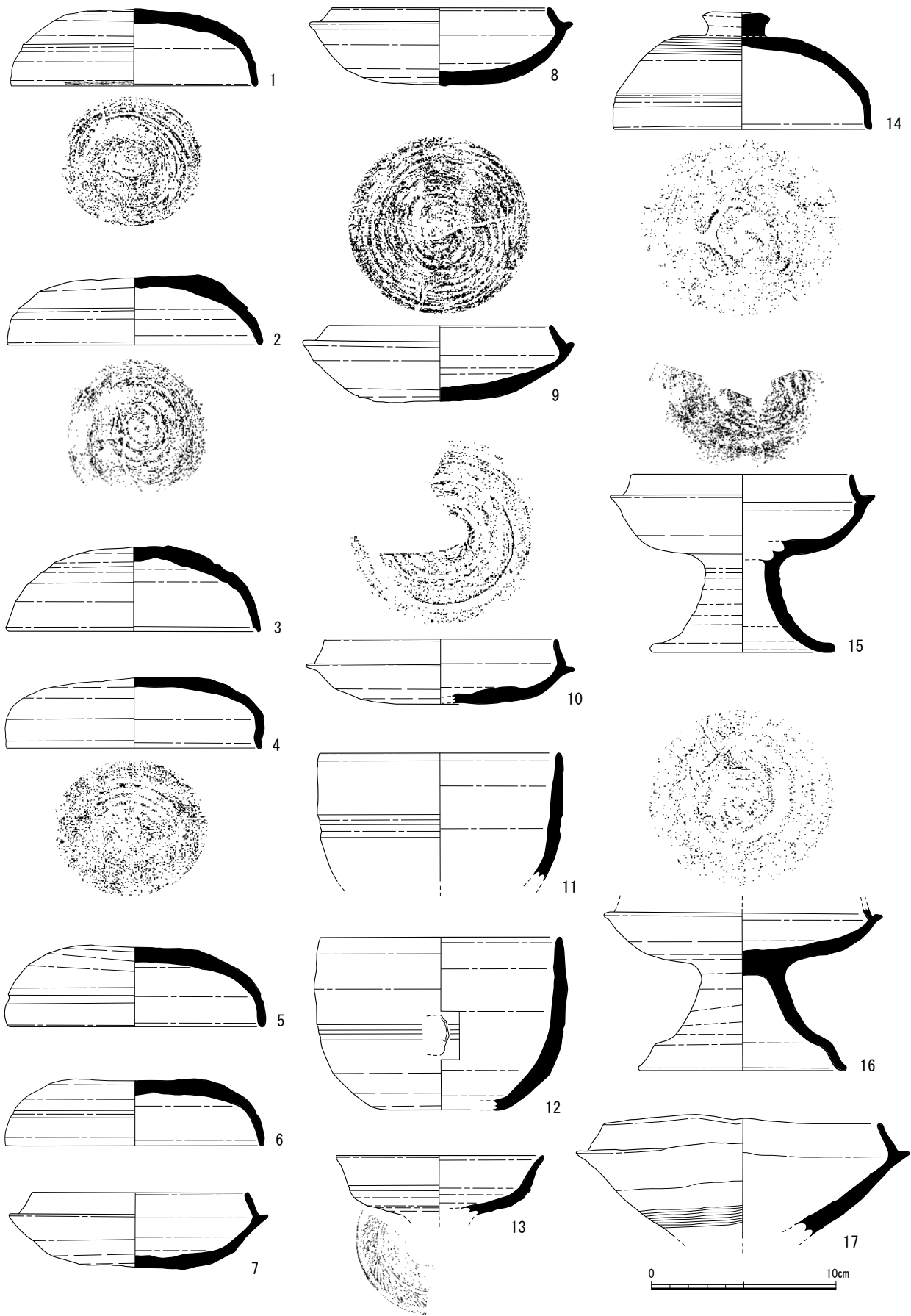


第3図 遺構配置図 (1/150)

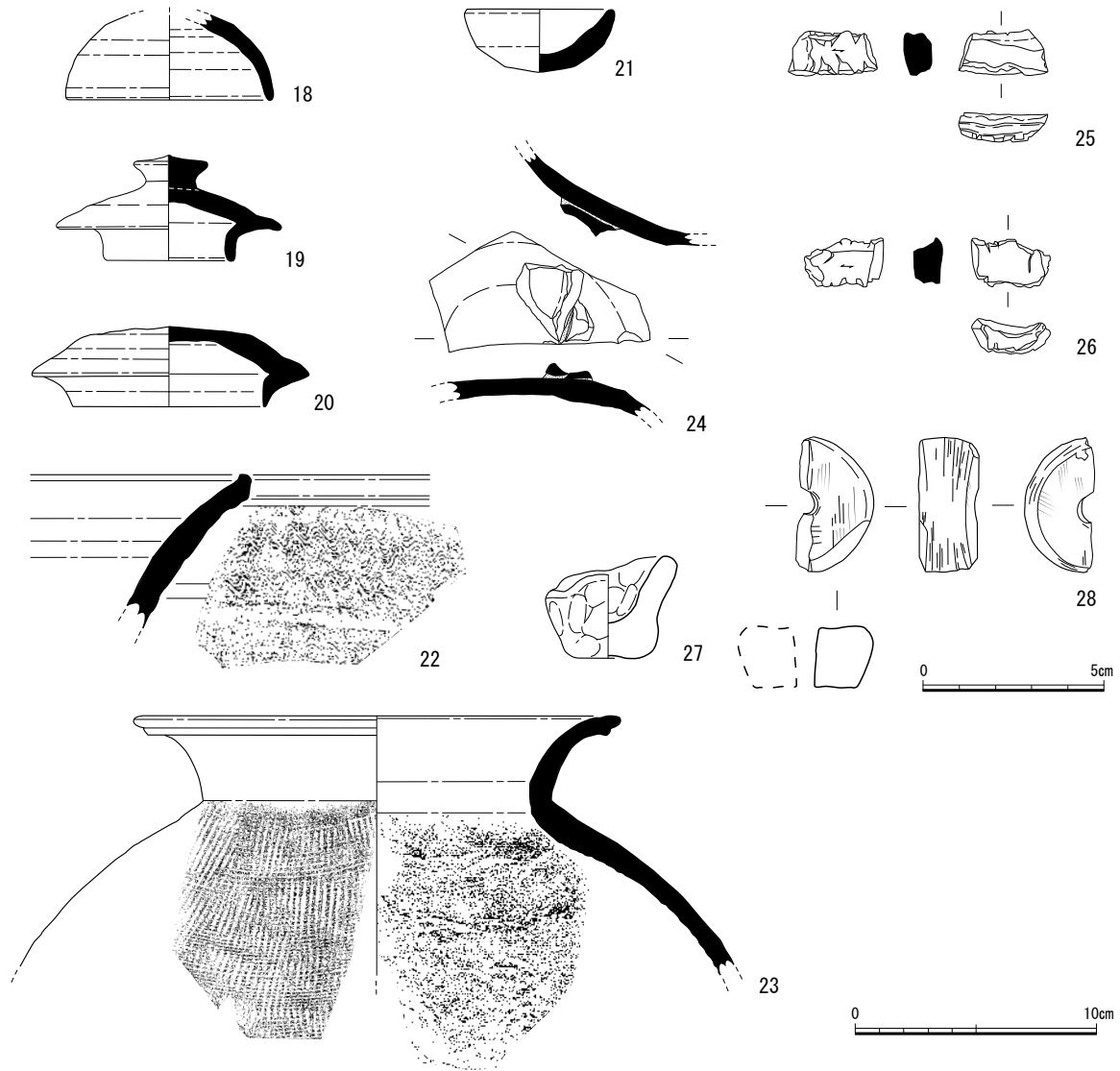


第4図 SC01実測図 (1/60)

ケズリされ、内面には同心円文当て具痕が残るものが主体をなす。4を除き天井部と体部の境に浅い段もしくは沈線が廻る。また、3のみ口縁端部に浅い段が廻る。7～10は杯H身。口径11.7～12.6cm、最大径14.0～14.7cmを測る。立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめる。いずれも底部は回転ヘラケズリされ、9・10は内面に同心円文当て具痕が残る。11・12は碗。いずれも体部中央に2条の沈線が廻る。12は体部と底部の境が回転ヘラケズリされて丸みを



第5図 SC01出土遺物実測図① (1/3)

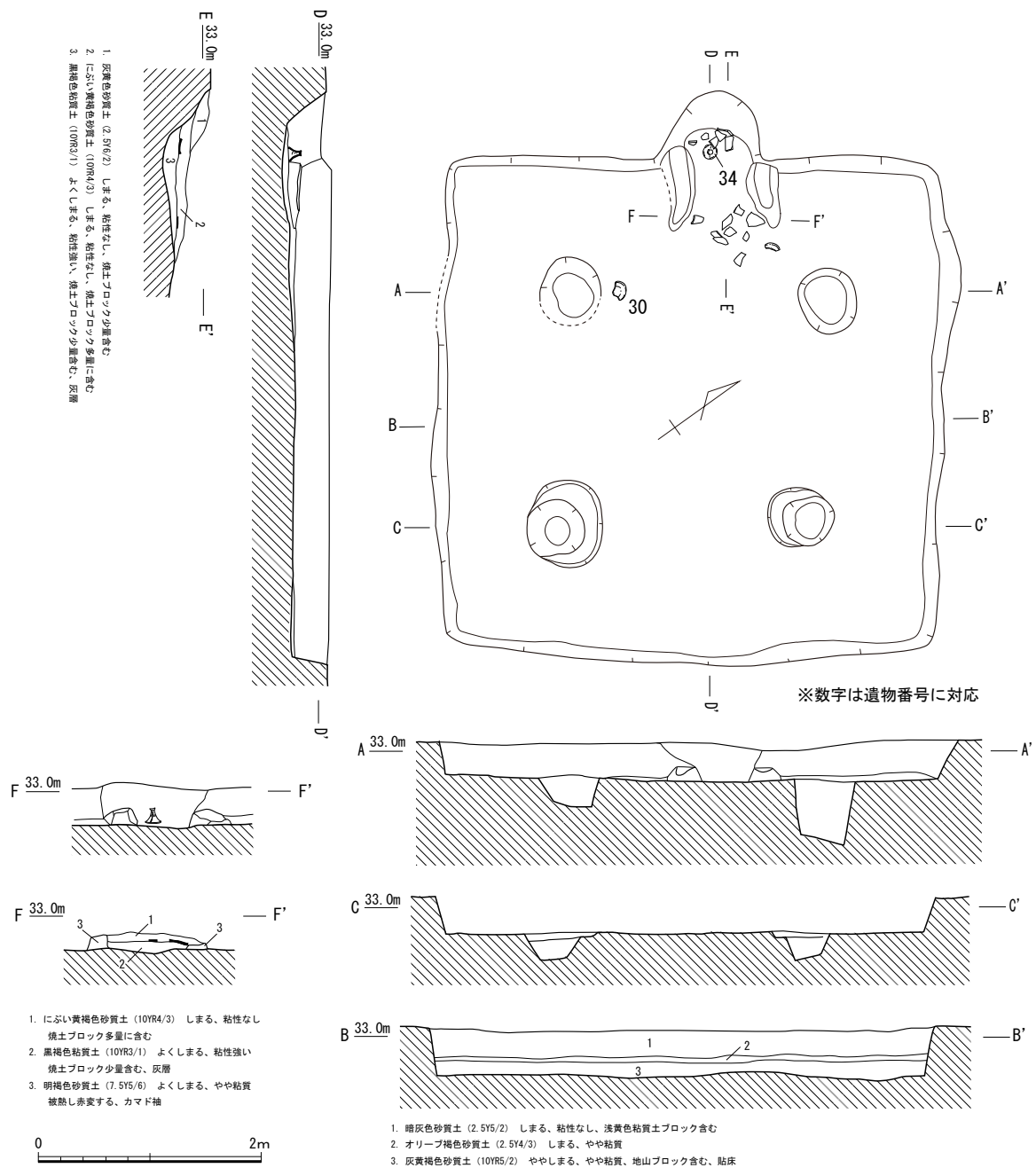


第6図 SC01出土遺物実測図② (25～28は1/2、その他は1/3)

帯びる。また、体部中央には把手とみられる粘土の貼り付け痕が認められる。

13は無蓋高杯である。杯部中央には稜が廻り、下半には櫛歯状の連続刺突文を施す。14は高杯蓋でボタン状のつまみがつく。天井部と体部の境には沈線が廻る。天井部にカキメが施され、内面には同心円文当て具痕がわずかに残る。15～17は有蓋高杯。15・16は短脚のもので、15は脚裾部がハの字状に開き、16はくの字形に屈曲する。いずれも杯部内面に同心円文当て具痕が残る。16は立ち上がりが打ち欠かれており、鋸歯状をなす。17は脚部を欠く。体部下半にはカキメが廻り、全体に焼き歪む。18～20は壺蓋。18は短頸壺に伴うものか。天井部は丸みを帯び、口縁端部は丸くおさめる。19・20は内面にかえりがつく。19は直立した長いかえりを有し、天井部にはつまみがつく。外面全体に降灰がみられる。20は厚ぼったく稚拙なつくり。短く内傾したかえりをもつ。天井部には棒状の工具を用いて不定方向のナデを施す。21は小型の杯だろうか。底部は丸みを帯び、体部は内湾気味にのびる。

22・23は甕。22は口縁部片で、端部は上方へわずかにつまみ出す。上下2段の波状文が廻る。23は口縁端部がM字状をなす。胴部は外面擬格子状のタタキ、内面は同心円文当て具痕が残る。



第7図 SC02実測図 (1/60)

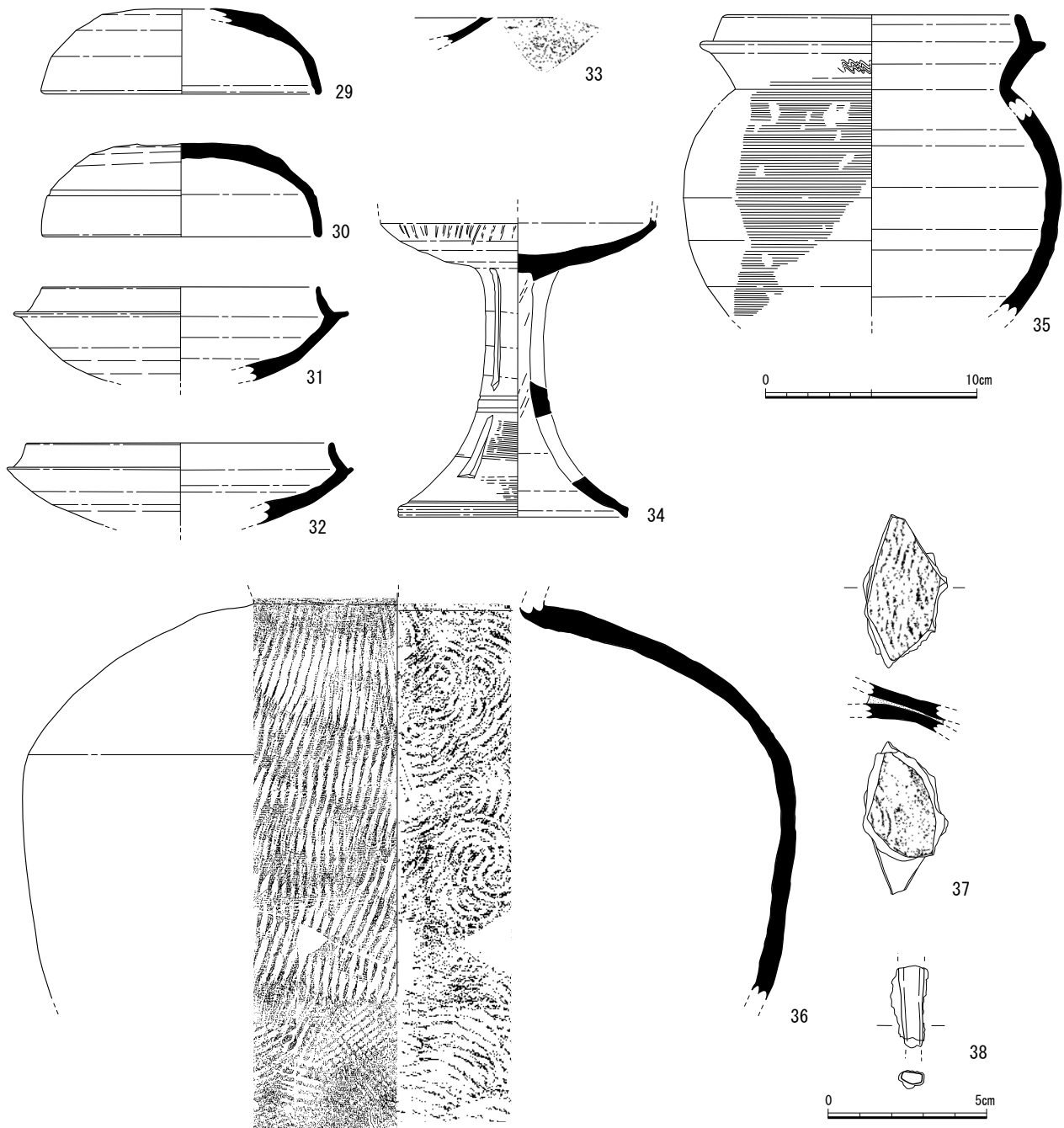
24は糊着資料。杯H蓋の天井部に、杯H身が糊着している。25・26は切削物で、いずれも須恵質である。片面にはケズリの痕跡が認められる。

土師器 (27) ミニチュアの鉢。手づくねで成形され、ユビオサエの痕跡が明瞭に残る。

石製品 (28) 滑石製の紡錘車。断面逆台形をなし、表面は丁寧に研磨される。

SC02 (第7図、図版3・4)

調査区北側に位置する。平面略方形で、北壁で4.25m、西壁で4.25m、最深部で35cmを測る。床面はほぼ平坦で、厚さ10～20cmの貼床を検出した。北壁中央に明褐色砂質土でカマドを構築し、袖は高さ15cmほど残存する。カマド袖は北壁から屋内に50cmほど突出し、両袖間は床面で50～90cmを測る。カマド内部は住居床面に比べて10cm程度くぼんでおり、内部には灰層と考えられる黒褐色粘質土が堆積し、その上に黄褐色の焼土層が形成される。煙道側は壁外

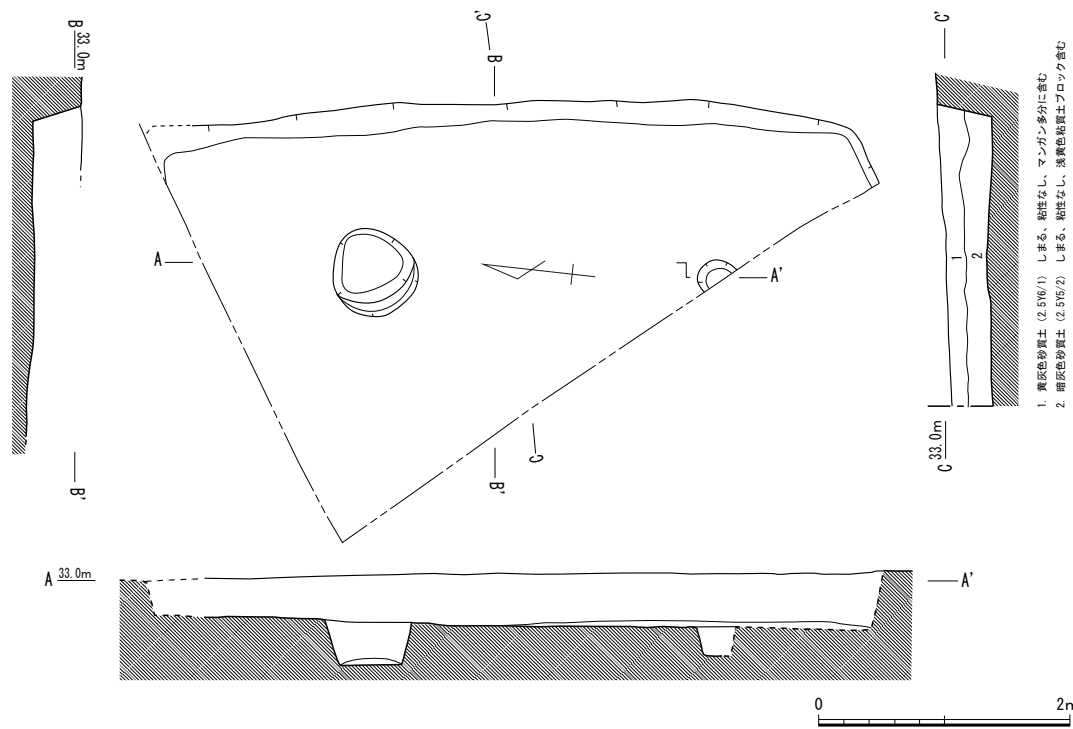


第8図 SC02出土遺物実測図 (38のみ1/2、その他は1/3)

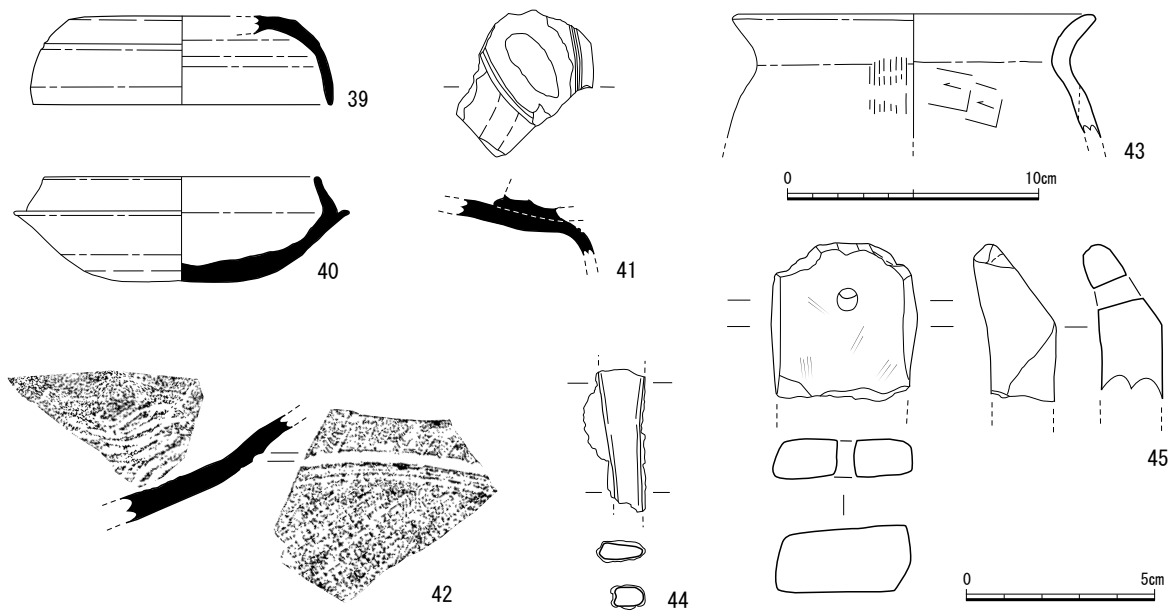
へ60cmほど突出する。カマド中央には須恵器高杯の脚部（第8図34）が据えられていた。支脚の可能性もあるが、明確な被熱は認められない。また、カマド周辺からは須恵器甕の胴部片（第8図36）がまとまって出土した。支柱穴は4基で、平面円形もしくは楕円形を呈し、直径50～60cm、深さ20～50cmを測る。

出土遺物（第8図、図版8）

須恵器（29～37） 29・30は杯H蓋。いずれも口径13.2cmを測る。天井部は回転ヘラケズリされ、30は天井部と体部の境に沈線が廻る。また、29は口縁部内面に浅い段が廻る。31・32は杯H身。口径13.2～14.6cm、最大径15.8～16.4cmを測る。立ち上がりは内傾し、端部は丸



第9図 SC03実測図 (1/60)

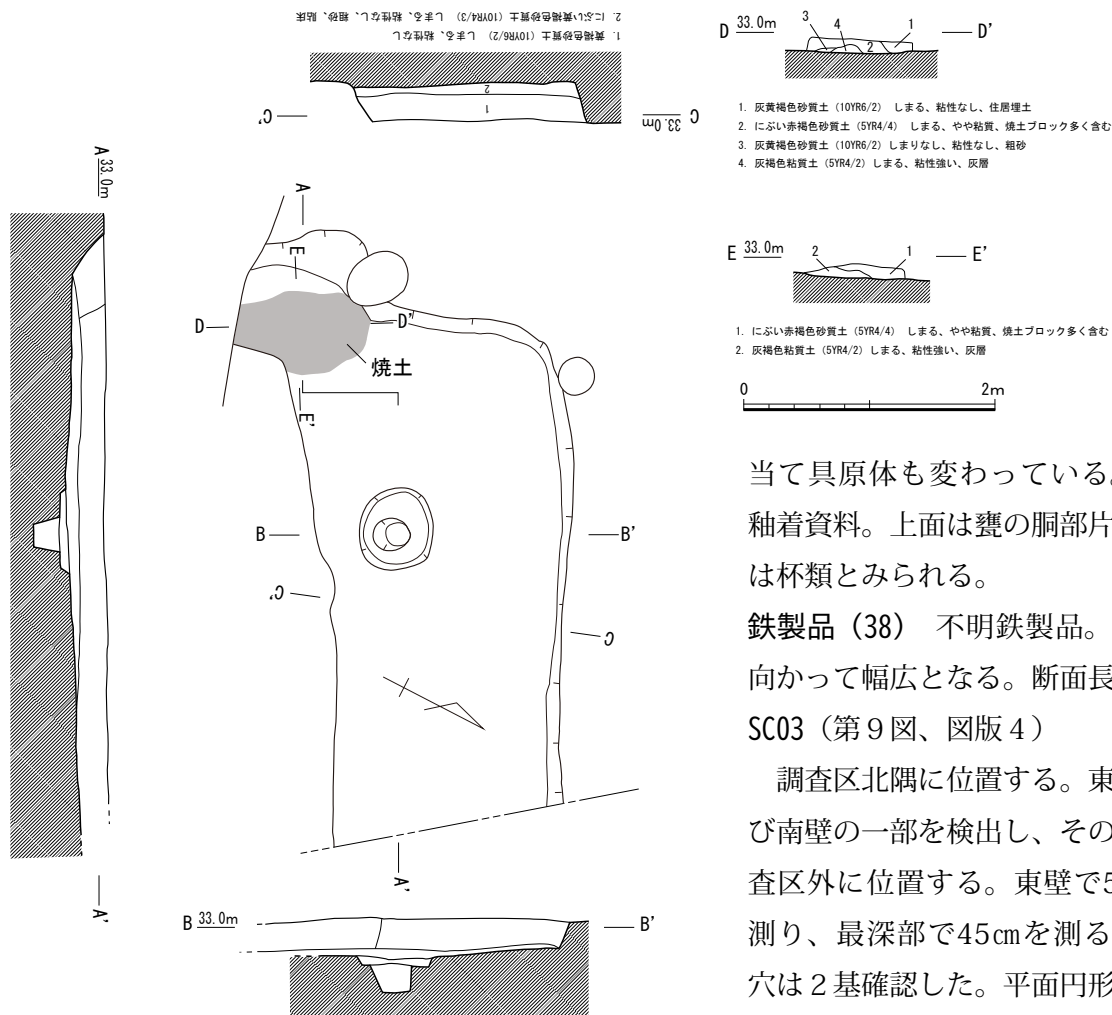


第10図 SC03出土遺物実測図 (44・45は1/2、その他は1/3)

くおさめる。底部は回転ヘラケズリされる。

33は壺で、口縁端部には面を有する。外面に波状文が廻る。34は無蓋高杯。外面には連続刺突文が廻る。脚部には長方形の透かしを上下2段、3方向に施す。上下の透かしは2条の沈線で画される。出土状況からカマドの支脚と想定されるが、顕著な被熱は認められない。

35は壺である。口縁部はくの字状を呈し、屈曲部には受け部が廻る。口縁部外面には波状文を施す。体部は球形をなし、外面にはカキメが廻る。36は甕の胴部。外面上半は平行タタキ、下半は擬格子タタキである。内面は同心円文当て具痕が残り、外面のタタキの変化と連動して、



第11図 SC04実測図 (1/60)

当て具原体も変わっている。37は
 粘着資料。上面は甕の胴部片、下面
 は杯類とみられる。

鉄製品 (38) 不明鉄製品。上方に
 向かって幅広となる。断面長方形。
 SC03 (第9図、図版4)

調査区北隅に位置する。東壁およ
 び南壁の一部を検出し、その他は調
 査区外に位置する。東壁で5.5mを
 測り、最深部で45cmを測る。支柱
 穴は2基確認した。平面円形あるい
 は楕円形を呈し、直径30～60cm、
 深さ25～35cmを測る。須恵器・土

師器・石製品・鉄製品が出土した。

出土遺物 (第10図)

須恵器 (39～42) 39は杯H蓋。口径11.8cmを測る。天井部と体部の境に浅い沈線が廻る。天井部は回転ヘラケズリされる。40は杯H身で、口径11.0cm、最大径13.3cmを測る。口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。底部は回転ヘラケズリされる。41は粘着資料。上面は杯H身、下面は杯H蓋とみられる。42は器台の小片。体部は口縁部に向かって外反する。外面は擬格子タタキ、内面は同心円文当て具痕がみられる。外面には1条の沈線が廻り、その上下に波状文を施している。

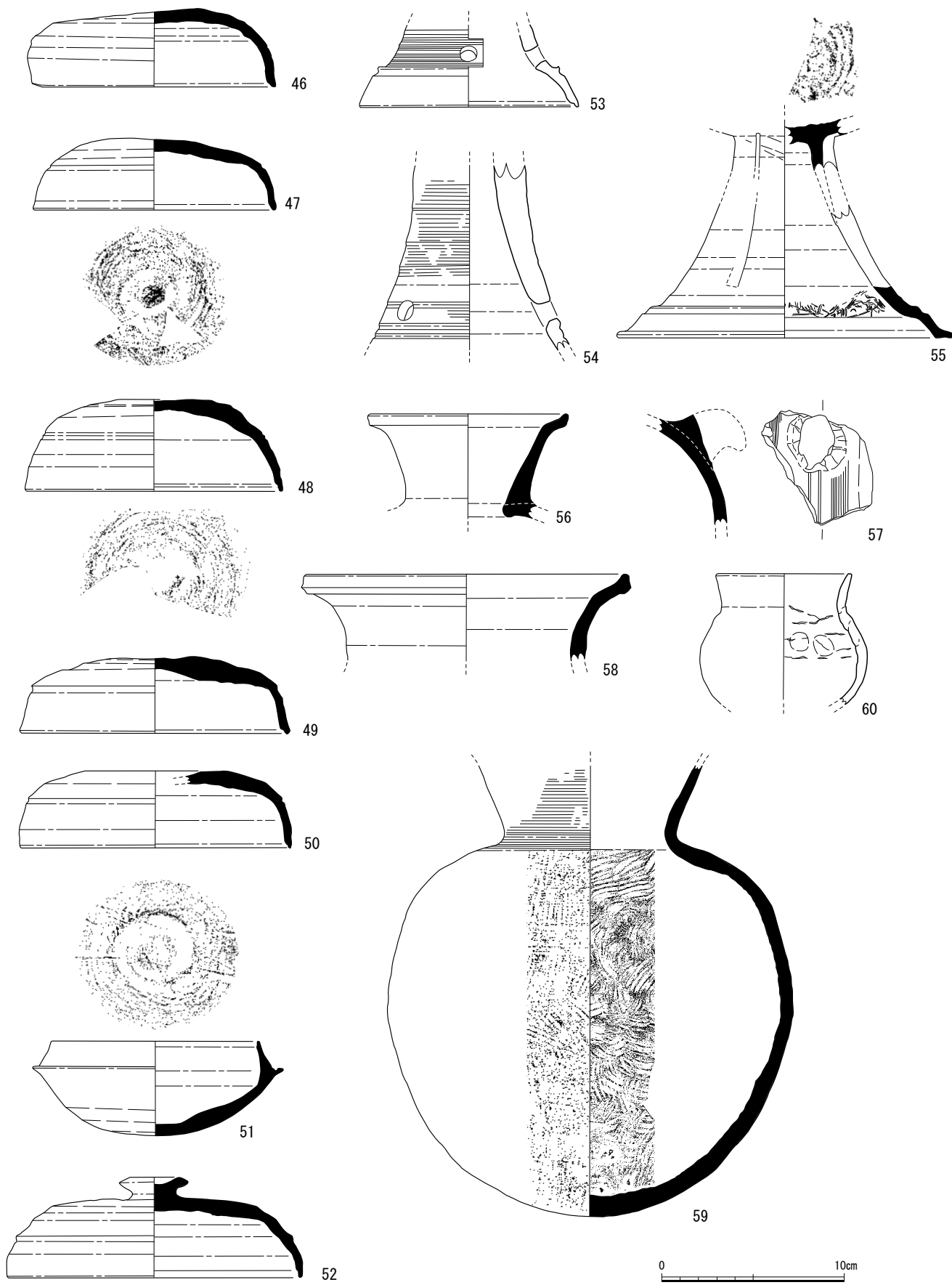
土師器 (43) 小型の甕。胴部は外面ハケ、内面ケズリ、口縁部はヨコナデである。

鉄製品 (44) 不明鉄製品。上方に向かって幅広となり、厚さを減じる。断面長方形。

石製品 (45) 砂岩製の提碁で、折損する。残存長4.1cm、最大幅3.85cm、最大厚1.8cmを測り、上部に径5.0mmの穿孔を施す。いずれの面も碁面として使用する。

SC04 (第11図、図版4)

調査区南側に位置する。南半部分をSC05・SC06に切られ、東壁は調査区外にのびる。平面略方形とみられ、北壁は検出部分で3.6m、最深部で30cmを測る。西壁中央にはカマドに伴う



第12図 SC04出土遺物実測図 (1/3)

焼土の広がりを確認したが、カマド自体は失われていた。煙道側が壁外へ30cmほど突出している。床面上には灰層と考えられる灰褐色粘質土があり、その上に赤褐色の焼土層が堆積する。支柱穴は1基のみ確認した。平面円形を呈し、直径60cm、深さ25cmを測る。

出土遺物（第12図、図版8）

須恵器（46～59） 46～50は杯H蓋。口径は13.3～14.8cmを測る。48は天井部に丸みを有するが、その他は天井部が平坦である。いずれも天井部は回転ヘラケズリされ、47・48の内面には同心円文当て具痕が残る。47～50は天井部と体部の境に浅い段もしくは沈線が廻る。また、48～50は口縁端部に浅い段が廻り、46・47は口縁部を丸くおさめる。51は杯H身。口径11.4cm、最大径13.8cmを測る。立ち上がりは高く、口縁端部に浅い段がつく。深みのある器形で、底部は丸みを帯びる。底部外面は回転ヘラケズリされ、内面には同心円文当て具痕が残る。52は高杯蓋で、口径15.4cmを測る。天井部には、頂部がくぼんだ扁平なつまみがつく。天井部と体部の境に稜が廻り、口縁端部に段を有する。天井部は回転ヘラケズリされる。

53～55は高杯の脚部。53・54はいわゆる赤焼きで、53は脚裾付近に稜線が廻り、稜線より上位にはカキメおよび円孔を施す。脚端部内面には段が廻る。54は脚裾付近に円孔が2つ穿たれる。外面にはカキメが廻る。55は3方向に透かしを施す。脚裾部はくの字に屈曲し、内面には藁状の植物痕跡が認められる。杯部はわずかに残存し、内面に同心円文当て具痕が残る。

56は瓶類の口縁部で、端部は上方へとつまみ出される。57は提瓶の肩部片。把手は先端を欠くが、鉤状をなすものとみられる。外面には2条の沈線とカキメが廻る。58・59は甕。58は口縁部が肥厚し、端部は上方へとつまみ出される。59は小型の甕で、頸部が締まる。頸部は外面カキメ、内面ナデ。胴部は外面が擬格子タタキのち一部カキメ、内面には同心円文当て具痕が残る。

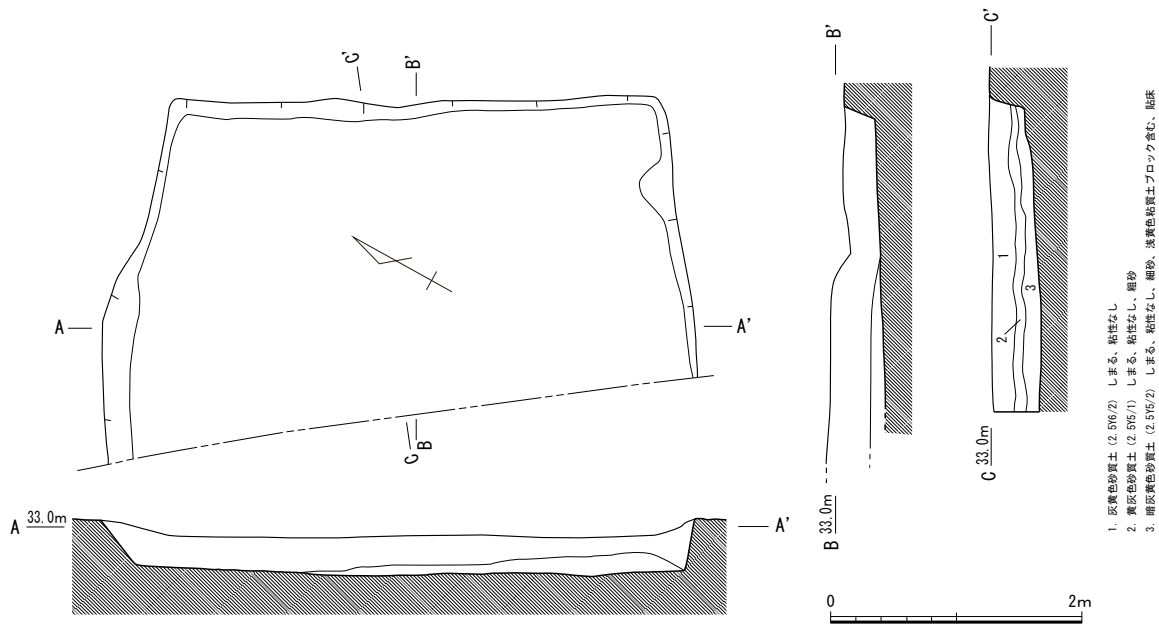
土師器（60） 60は小壺。口縁部は直線的に開き、胴部は球形をなす。内外面ナデ調整。内面には粘土紐の繋ぎ目が明瞭に残る。

SC05（第13図、図版4）

調査区南端に位置する。東壁および南北壁の一部を検出し、その他は調査区外に位置する。平面略方形とみられ、東壁は3.8m、最深部で40cmを測る。床面はほぼ平坦で、貼床を10～15cmの厚さで検出した。支柱穴やカマドの痕跡は確認できなかった。

出土遺物（第14・15図、図版8）

須恵器（61～77） 61・62は杯H蓋。61は口径12.5cmを測り、平坦な天井部で、体部との境には鋭い稜が廻る。天井部外面は回転ヘラケズリされ、口縁部外面には縄目状の圧痕が廻る。62は口径13.4cmで、器高が高く、天井部は丸みを帯びる。天井部と体部の境には鈍い稜が廻り、口縁端部には浅い段がつく。天井部は回転ヘラケズリされ、内面には同心円文当て具痕が残る。63～66は杯H身。口径11.0～12.2cm、最大径13.0～15.0cmを測る。立ち上がりは内傾し、底部は丸みを帯びる。65は口縁端部に浅い沈線が廻り、その他は丸くおさめる。底部外面はいずれも回転ヘラケズリされ、65・66の内面には同心円文当て具痕が残る。



第13図 SC05実測図 (1/60)

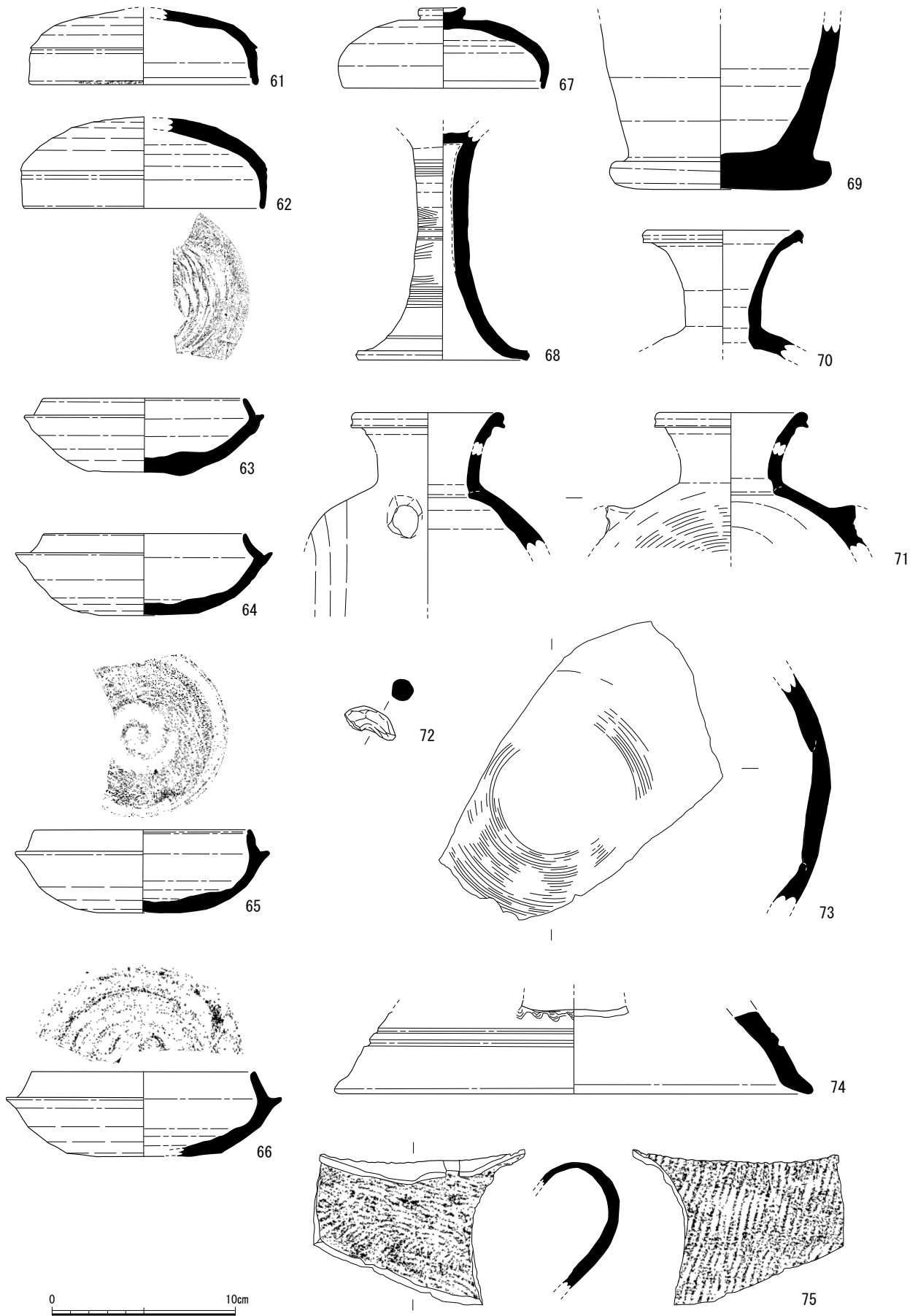
67は高杯蓋で、口径10.8cmを測る。頂部がくぼんだボタン状のつまみがつく。天井部は丸みを帯び、口縁部に向かってやや内湾する。口縁端部には段が廻る。天井部は回転ヘラケズリされる。68は高杯の脚部。長脚のもので、全体にカキメを施す。中央には2条の沈線が廻る。69は白である。底部はぶ厚い円盤状を呈し、体部は内湾気味に立ち上がる。円盤側部は面取りされ、底面は回転ヘラケズリされる。70～73は提瓶。70は頸部が長く、口縁端部に稜が廻る。71は頸部が短く、肩部に把手がつく。口縁端部には稜が廻る。胴部は片面が回転ヘラケズリされ、もう片面にはカキメが廻る。72は把手で、鉤状を呈する。73は胴部片で、外面にはカキメが廻り、内面には円盤閉塞の痕跡が残る。74は器台の脚部。やや内湾しながら脚端部へ至る。外面に2条の沈線と波状文が廻り、透かしを施す。

75～77は甕。75は胴部片で、大きく焼き歪む。外面には擬格子タタキ、内面には同心円文当て具痕が残る。76は口縁部が大きく外反し、端部は肥厚する。胴部外面は平行タタキ、内面は同心円文当て具痕が残る。77は大甕で、口縁端部がM字状をなす。外面には波状文を上下2段施す。また、波状文の下位には、2条の沈線が廻る。胴部外面は平行タタキ、内面には同心円文当て具痕が残る。

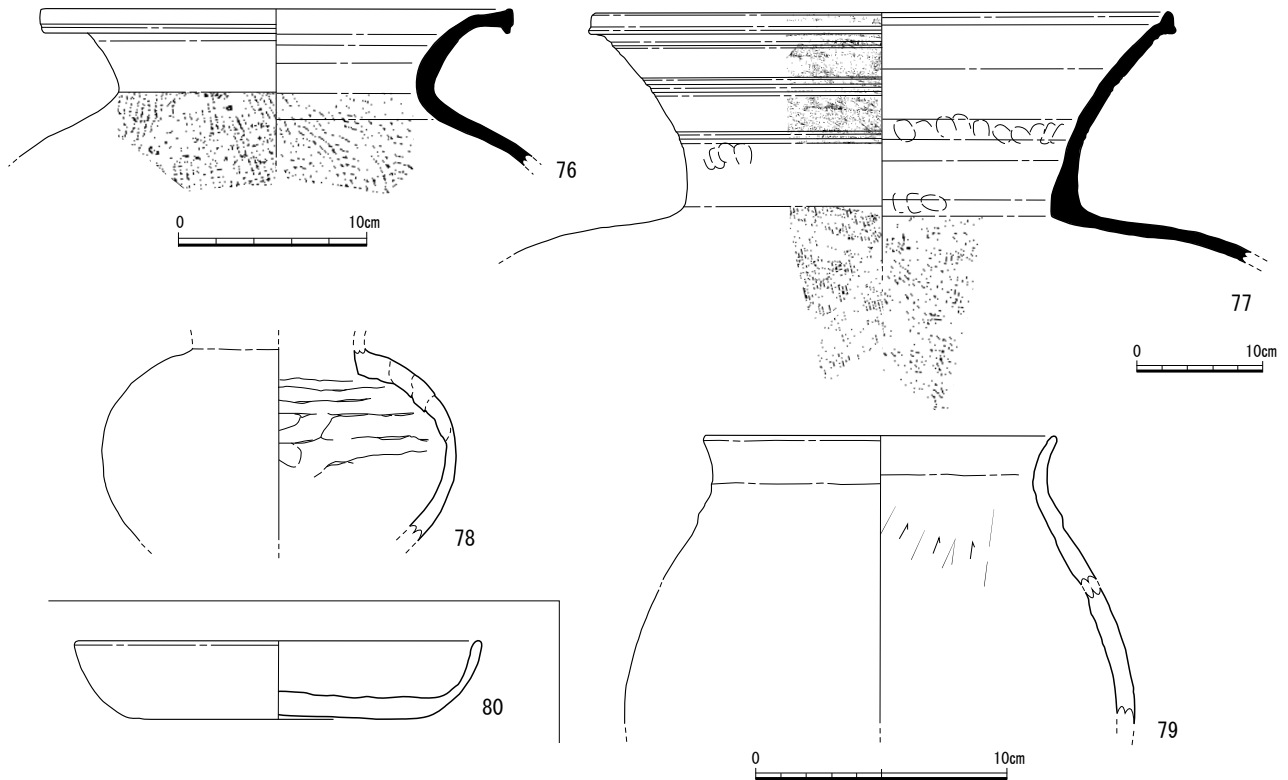
土師器 (78～80) 78は壺で、胴部は球形をなす。外面ナデ、内面には粘土紐の繋ぎ目が明瞭に残る。79は甕。口縁部はわずかに外反する。外面は摩滅して調整は不明、内面にはケズリを施す。80は杯。口縁部に向かってやや内湾し、底部と体部の境は丸みを帯びる。底部に板状圧痕がみられる。SC06の床面で出土したが、当該期の遺物に類例が見出せず、後世の遺構を認識できずに掘り下げてしまい、混ざり込んだ可能性も残る。

SC06 (第16図、図版5・6)

調査区南端に位置する。西壁および南北壁の一部を検出し、その他は調査区外へとのびる。西壁はSC05に切られている。平面略方形とみられ、西壁は5.1m、北壁は検出部分で3.8m、最深部で20cmを測る。床面は平坦で、10cm程度貼床されていた。主柱穴は4基で、平面円形



第14図 SC05出土遺物実測図① (1/3)



第15図 SC05出土遺物実測図② (76は1/4、77は1/6、その他は1/3)

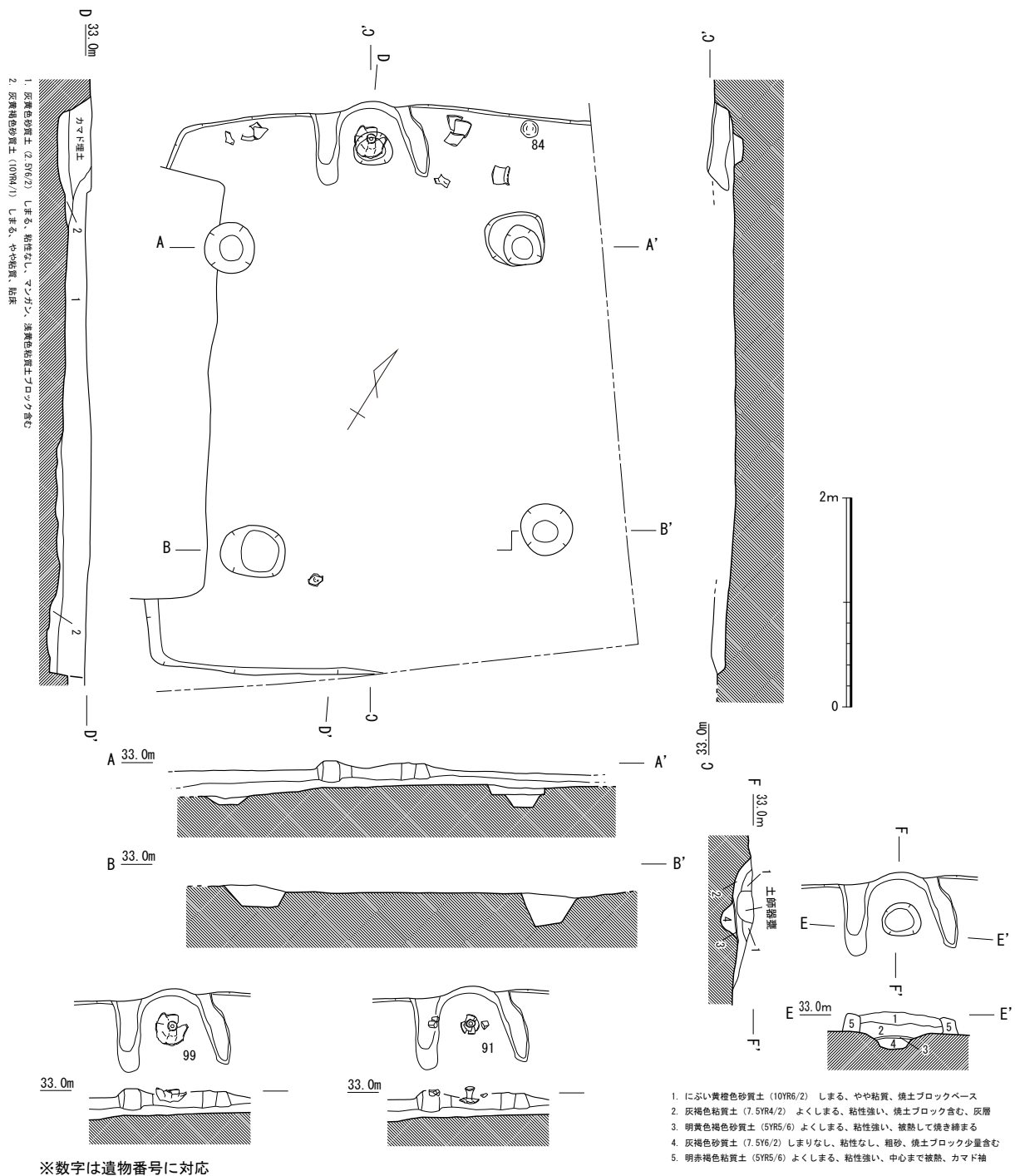
もしくは楕円形を呈し、直径50～60cm、深さ10～30cmを測る。

北壁中央には明赤褐色粘質土でカマドを構築し、袖は高さ20cmほど残存する。カマド袖は北壁から屋内に0.7mほど突出し、両袖間は床面で50～70cmを測る。カマド中央には径30cmのピットがあり、灰褐色の粗砂で充填されていた。その上面は強く被熱し、硬く焼きしめる。カマド内部の床面上には灰層と考えられる灰褐色粘質土が堆積していた。カマド中央には支脚の可能性のある須恵器の無蓋高杯(第17図91)が逆位で据えられていた。また、カマドにかけられた土師器甕(第18図99)が落ち込み、甕の底部に支脚が貫通した状態であった。カマドの周辺では、須恵器杯類や土師器甕などがまとまって出土した。

出土遺物(第17・18図、図版8・9)

須恵器(81～97) 81～84は杯H蓋。口径13.0～14.4cmを測る。いずれも天井部は平坦で、81・82は体部との境に沈線が廻る。82は口縁部内面に浅い段を有し、その他は丸くおさめる。天井部外面は回転ヘラケズリされ、81・82の内面には同心円文当て具痕が残る。82は大きく焼き歪み、84は酸化炎焼成のため赤褐色を呈す。85～87は杯H身。口径11.4～12.9cm、最大径13.7～14.7cmを測る。立ち上がりは内傾し、85・87の口縁部内面には浅い沈線が廻る。底部外面はいずれも回転ヘラケズリされ、85・87の内面には同心円文当て具痕、86は平行文当て具痕が残る。85の外面には別固体が釉着し、87は大きく焼き歪む。

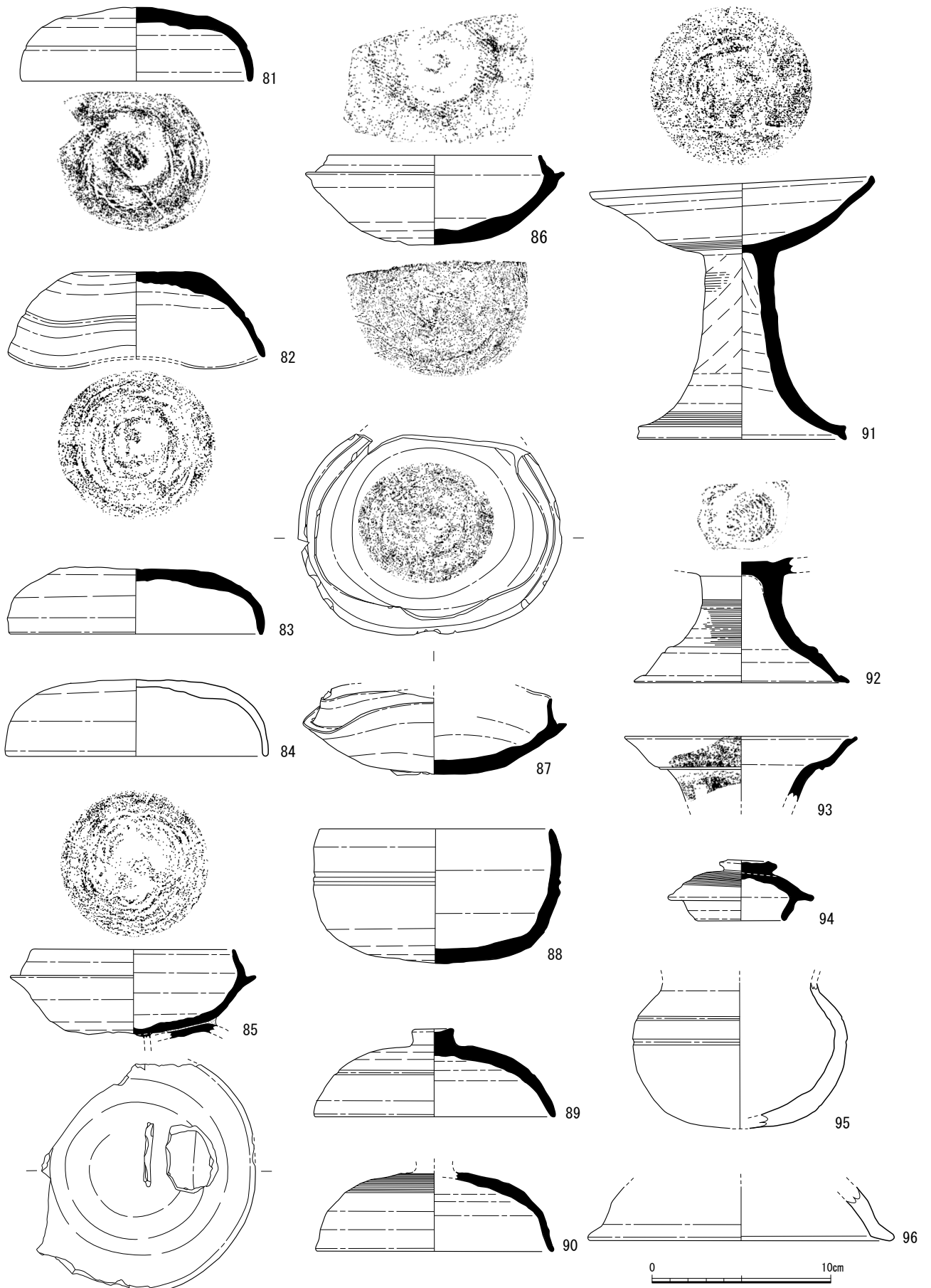
88は椀で、口縁部は内湾する。外面中央に2条の沈線が廻り、底部は回転ヘラケズリされる。89・90は高杯蓋。89はボタン状のつまみがつき、天井部と体部の境に沈線が廻る。90は天井



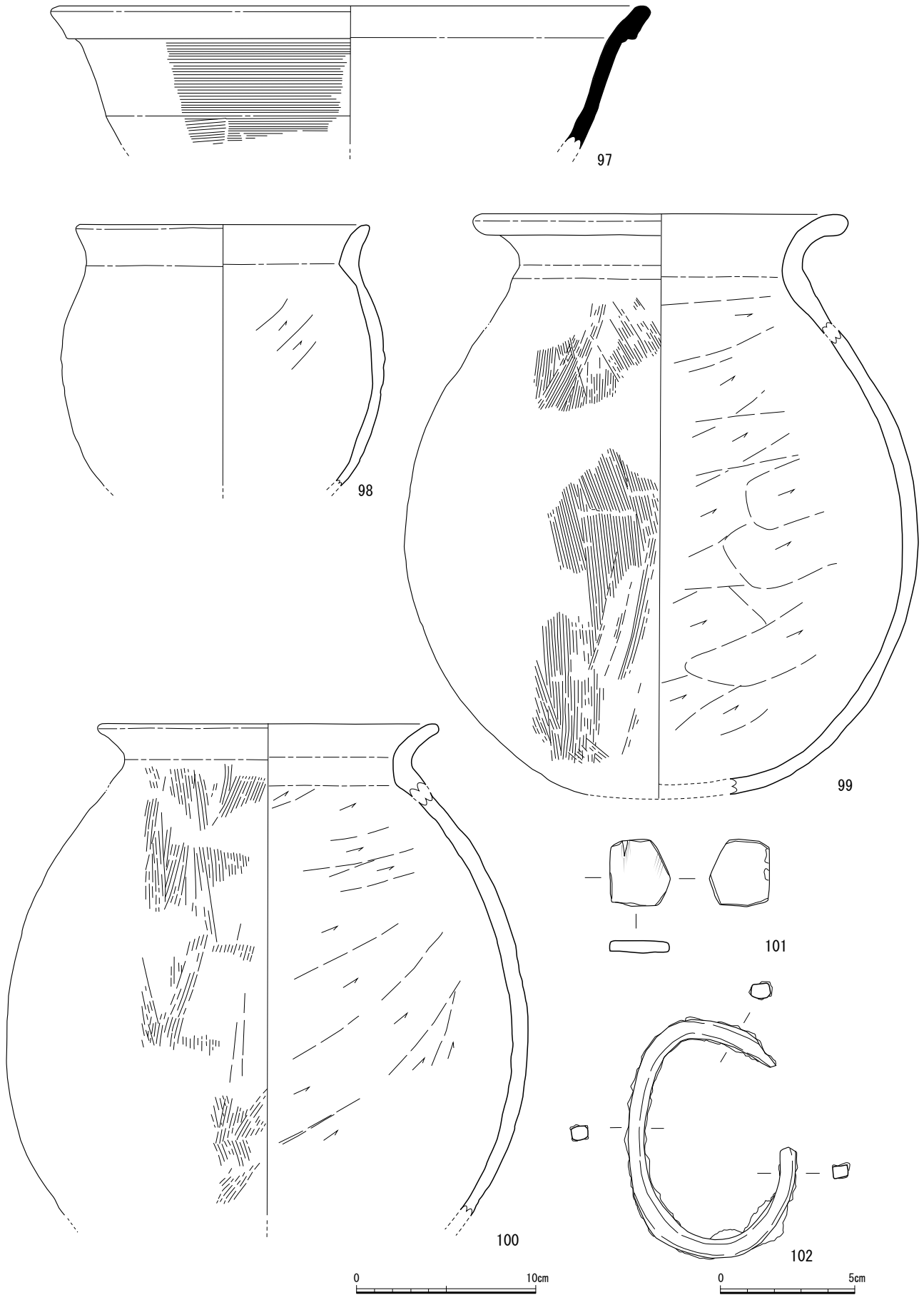
第16図 SC06実測図 (1/60)

部にカキメを施す。91・92は高杯。91は通常の高杯と形態が大きく異なる。杯部は、底部が丸みを帯び、体部から口縁部に向かってやや外反する。口縁端部は上方へとつまみ出される。外面にはカキメが廻り、内面には同心円文当て具痕が残る。脚部はハの字状に開き、端部は短く垂下する。出土状況からカマドの支脚と想定されるが、顕著な被熱は認められない。92は裾部が屈曲し、端部は外へとつまみ出される。外面にカキメを施し、杯部内面には同心円文当て具痕が残る。

93は臚。頸部と口縁部の境は屈曲し、屈曲部には稜が廻る。口縁端部には沈線を施す。口縁部および頸部には波状文が廻る。94は壺蓋で、内面に内傾するかえりを有し、ボタン状の



第17図 SC06出土遺物実測図① (1/3)



第18図 SC06出土遺物実測図② (101・102は1/2、その他は1/3)

つまみがつく。天井部外面にはカキメを施す。95・96は赤焼き須恵器。95は壺で、胴部は球形をなす。外面に2条の沈線が廻る。96は高杯か。裾部は内湾し、端部は外へと踏ん張る。97は器台。口縁部に向かってやや外反し、端部外面は肥厚する。外面にはカキメを施し、内面には同心円文当て具痕が薄く残る。

土師器 (98～100) 98～100は甕である。98は球胴をなし、外面は摩滅し調整不明瞭。内面は斜め方向のケズリを施す。99・100は長胴をなし、口縁部は短く外反する。胴部は外面ハケ後ナデ、内面はケズリである。口縁部は内外面ともにナデである。

石製品 (101) 101は、滑石片。略方形をなす。

鉄製品 (102) 102は不明鉄製品で、平面楕円のリング状を呈する。断面は長方形で、片方の先端部分が尖る。

SC07 (第19図、図版6)

調査区中央に位置する。北壁および南壁の一部を確認した。西壁および南壁はSC01に切られ、東壁は調査区外へのびることから、詳細な平面形態は不明確である。深さは、最深部で20cmを測る。

出土遺物 (第20図)

須恵器 (103) 杯H蓋で、口径12.3cmを測る。天井部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。

(2) 土坑

SK01 (第21図、図版6)

調査区中央で検出した。平面楕円形で、東半部は調査区外へのびる。長さ1.8m、最深部で15cmを測る。底面は平坦で、断面逆台形をなす。土師器・黒色土器の小片が出土した。

出土遺物 (第22図)

土師器 (104) 椀の高台部。高台は逆台形をなす。回転ナデ調整。

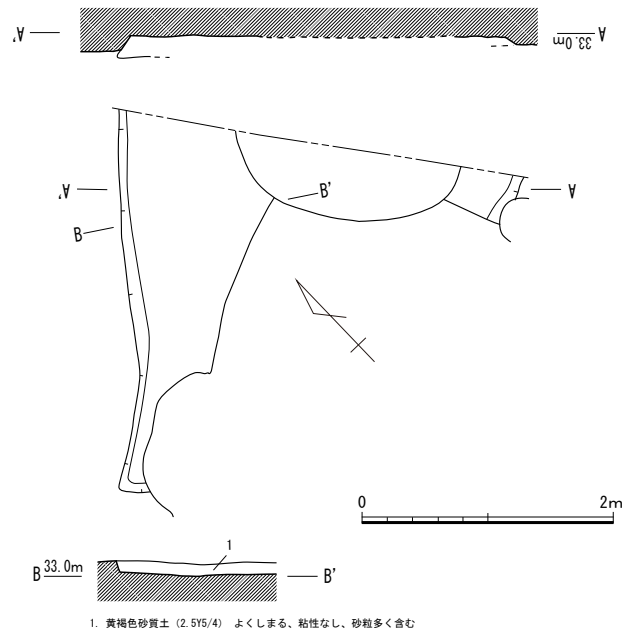
土製品 (105) 方形の土製品。小片のため、本来の形態は不明。各面は丁寧になでられ、土師質に焼成される。土器焼成に伴う棒状土製品の類か。

SK03 (第21図)

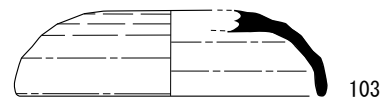
調査区南端で検出した。SC03・SC06を切る。平面楕円形をなし、長さ1.0m、幅65cm、最深部で10cmを測る。底面は平坦で、断面逆台形を呈する。土師器・黒色土器の小片が出土した。

出土遺物 (第22図)

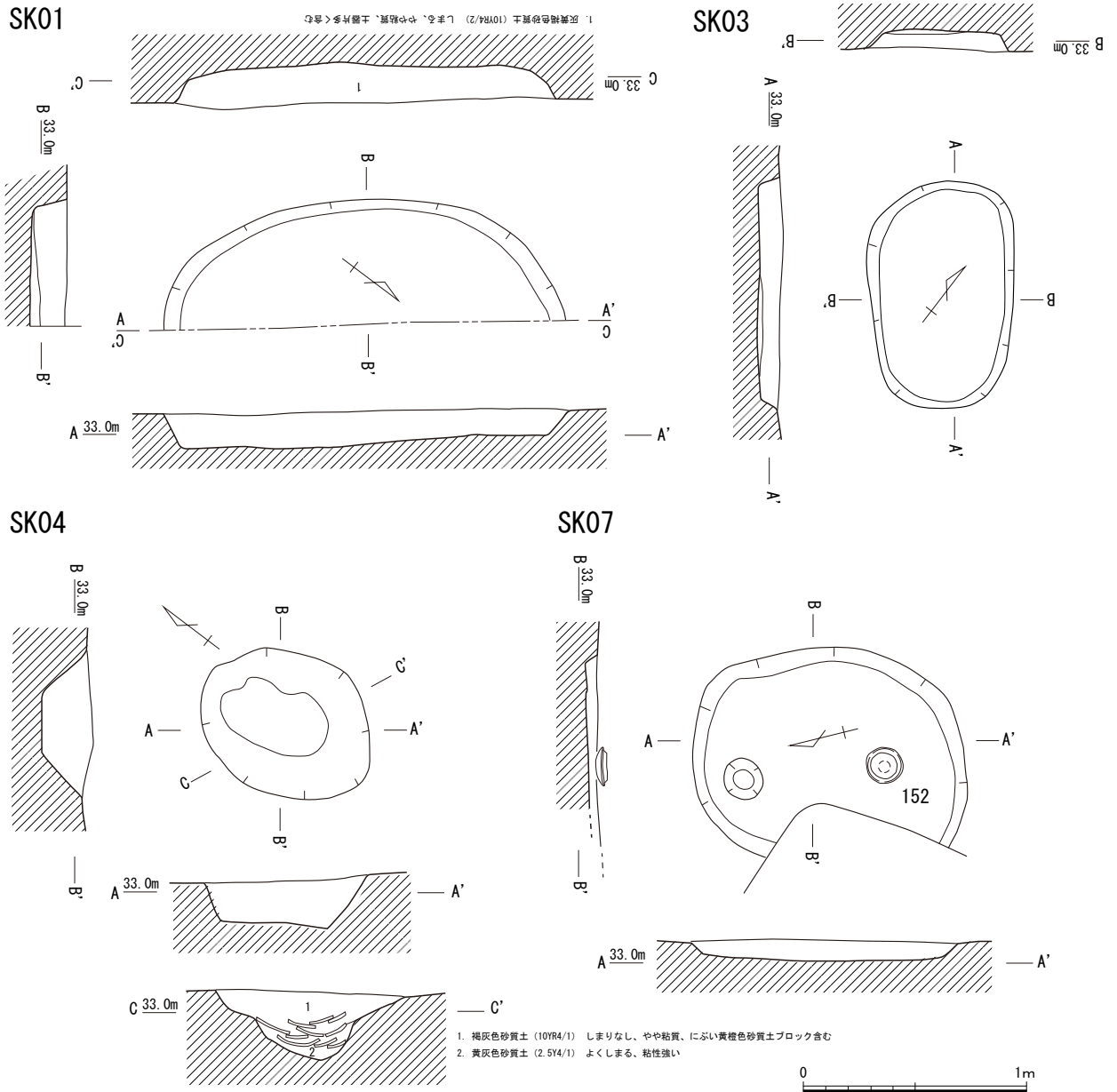
黒色土器 (106) 黒色土器B類の椀。体部は内湾気味にのび、口縁端部は丸くおさめる。内外



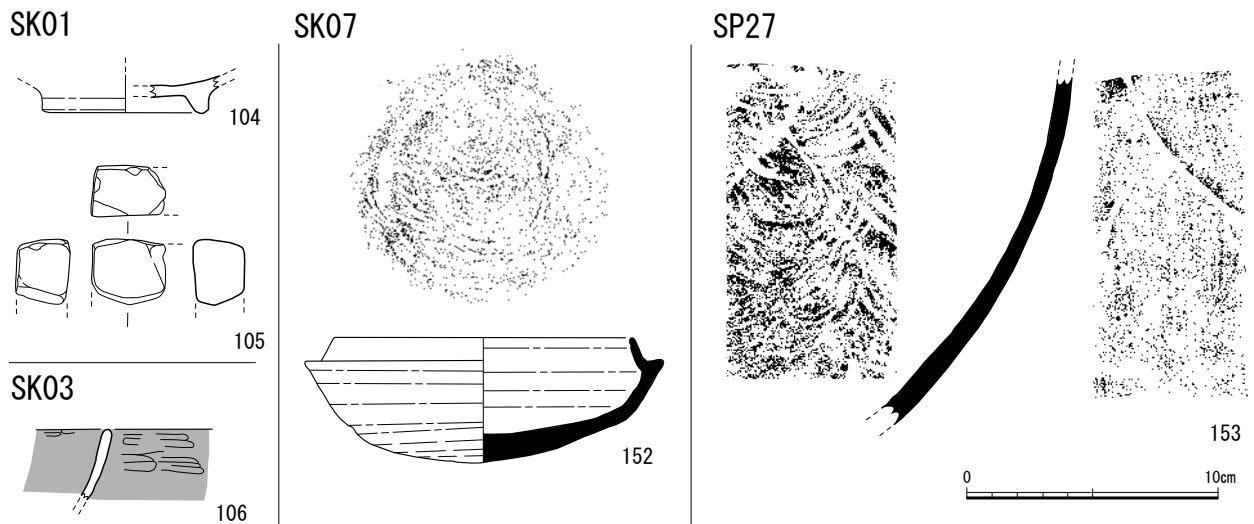
第19図 SC07実測図 (1/60)



第20図 SC07出土遺物実測図 (1/3)



第21図 SK01・03・04・07実測図 (1/30)



第22図 SK01・03・07・SP27出土遺物実測図 (1/3)

面に横位のミガキを施す。

SK04 (第21図、図版4)

調査区北端で検出した。平面楕円形で、長さ85cm、幅65cm、最深部で20cmを測る。底面は平坦で、断面逆台形をなす。小皿、丸底杯、椀が折り重なるように出土した。

出土遺物 (第23図、図版9・10)

土師器 (107～142) 107～119は小皿。口径10～11cm、器高1.2～1.4cmにまとまる。いずれも底部ヘラ切りで、未調整のものとナデを施すものがある。摩滅して不鮮明なものを除き、底部には板状圧痕が残る。口縁部は緩やかに開き、端部は丸くおさめる。色調はいずれも浅黄色を呈し、焼成はやや甘く軟質である。120～141は丸底杯。口径14.6～16.4cm、器高3.2～3.8cmを測る。平底の杯の底部を押し出して丸底とするもので、体部中位に屈曲を残す。底部はすべてヘラ切りで、板状圧痕を残すものもある。口縁端部は丸くおさめるものと、外側へとわずかにつまみ出すものがある。外面下半には指頭痕、内面にはコテ当て痕跡が残る。142は椀。丸底杯に高台を付したものである。外面下半に指頭痕、内面にコテ当て痕跡が残る。外側へと踏ん張る高台がつく。

黒色土器 (143～151) 143～149は黒色土器A類。143・144は丸底杯。通常のものと同形態、技法ともに差異はない。145～149は椀で、口径14.4～16cm、器高5.7～6.2cmを測る。いずれも半球状の深みのある体部を呈し、ハの字に開く高い高台がつく。口縁端部は外側へとつまみ出される。押し出し技法により成形され、外面下半には指頭痕が残る。内面にはミガキが施され、一部にはコテ当て痕跡がみられる。150・151は黒色土器B類。口径14.2～15.6cm、器高5.5cmを測る。器形はA類と差異はない。150は器面が荒れて調整不明瞭だが、151は内外面ともにミガキが施される。

SK07 (第21図)

調査区中央で検出した。SC02に切られる。平面楕円形で、長さ1.2m、幅90cm、深さ10cmを測る。

出土遺物 (第22図、図版9)

須恵器 (152) 杯H身。口径11.9cm、最大径14.3cmを測る。立ち上がりは内傾し、口縁部内面には浅い沈線が廻る。底部外面は回転ヘラケズリされ、内面には同心円文当て具痕が残る。

(3) ピット

須恵器 (153) 甕の胴部片。外面擬格子タタキ、内面は同心円文当て具痕が残る。SP27出土。

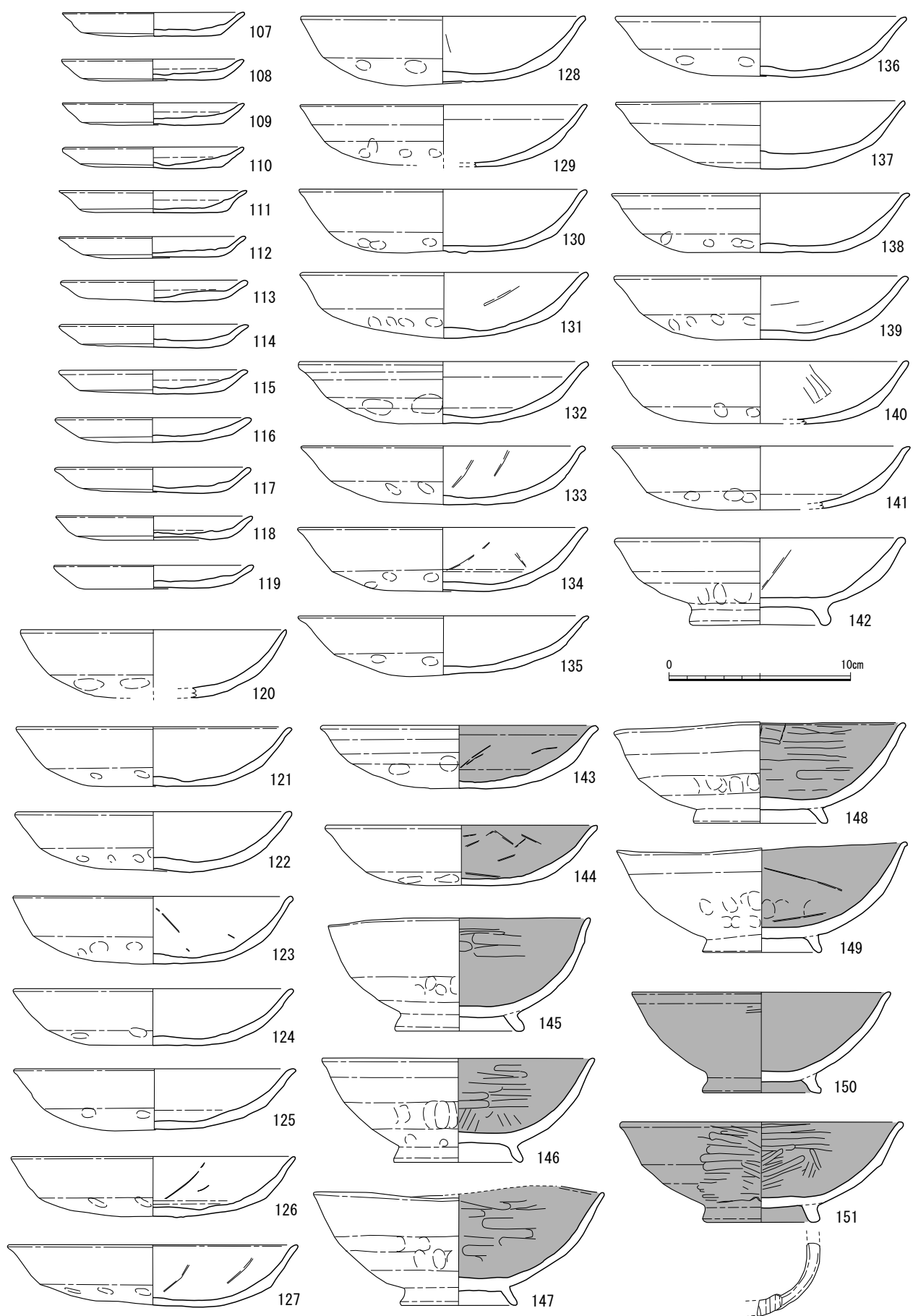
(4) その他の出土遺物

ここでは、遺構検出および表土剥ぎで出土した遺物を報告する。

SC04～06一段下げ時出土遺物 (第24図)

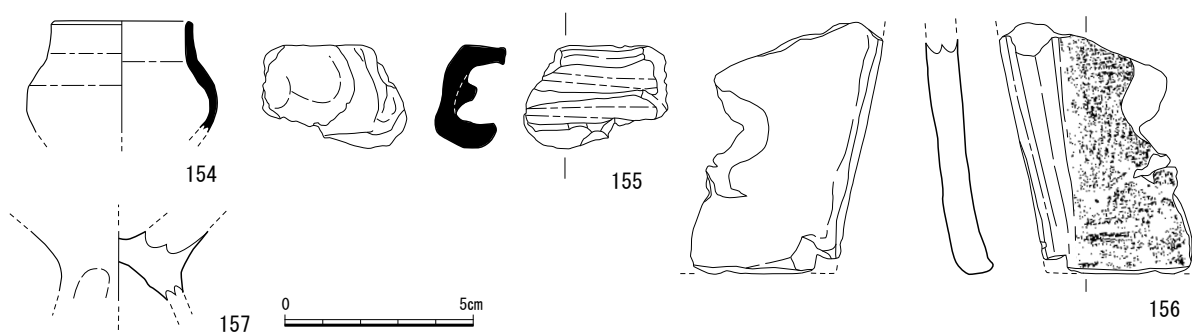
須恵器 (154・155) 154は小型壺。胴部は球形で、口縁部は垂直にのびる。内外面回転ナデ調整。155は器種不明。突帯が3条並び、断面は山の字状をなす。手づくねにより成形される。

土師器 (156・157) 156は移動式カマドの焚口部分。焚口側部には断面台形の突帯が付されており、おそらく庇へと連結するものだろう。外面は平行タタキ、内面には薄く同心円文当て

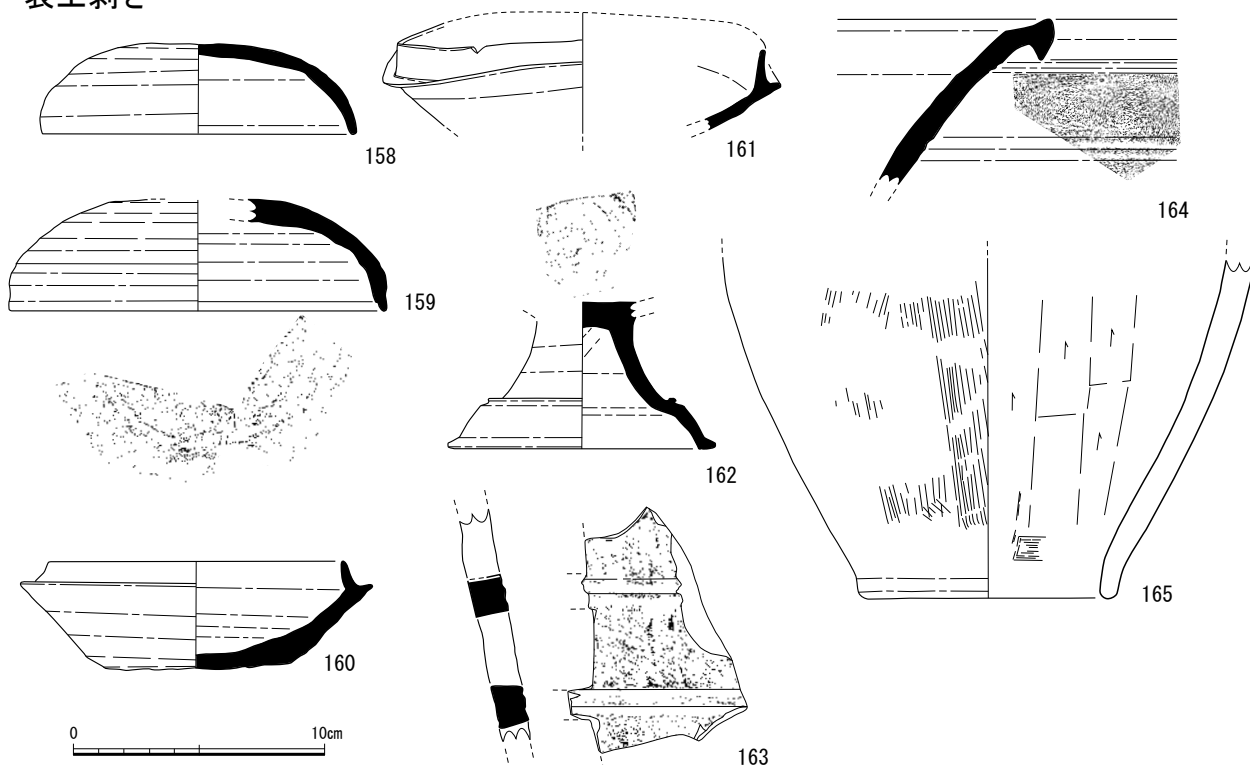


第23図 SK04出土遺物実測図 (1/3)

SC04 ~ 06 一段下げ



表土剥ぎ



第24図 SC04 ~ 06一段下げ・表土剥ぎ出土遺物実測図 (155・157は1/2、その他は1/3)

具の痕跡が残る。

157は鉢形のミニチュア土器。手づくね成形である。

表土剥ぎ出土遺物 (第24図)

須恵器 (158 ~ 164) 158・159は杯H蓋。いずれも天井部は回転ヘラケズリされる。158は口縁端部を丸くおさめ、159は口縁部内面に浅い段が廻る。160・161は杯H身。160は底部回転ヘラケズリされる。161は大きく焼き歪む。口縁部内面には浅い沈線が廻る。162は高杯。裾部はくの字に屈曲し、屈曲部には1条の突帯が廻る。杯部内面には同心円文当て具痕が残る。163は波状文と2条1組の沈線を交互に施し、方形の透かしをあける。164は甕で、沈線と波状文が交互に施される。

土師器 (165) 165は甕。体部は下方に向かって内湾し、端部は垂直気味にのびる。外面に縦方向のハケ、内面の底部付近のみ横位のハケで、その他は縦方向のケズリを施す。

第1表 遺物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径④高台径 ⑤最大径※(復元値)(残存値)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調			備考
						A:胎土	B:焼成	C:色調	
1	須恵器	杯蓋	SC01	①13.3 ②4.15	天井部外面回転ヘラケズリ 天井部内面当て具痕 他は回転ナデ 外面中位1条の沈線がめぐる	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色 外N6/ 灰色		口縁部外面縄状痕あり	
2	須恵器	杯蓋	SC01	①13.7 ②3.8	天井部外面回転ヘラケズリ 天井部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:やや不良 C:内外N8/ 灰白色			
3	須恵器	杯蓋	SC01 D区	①(13.8) ②4.5	天井部外面回転ヘラケズリ 天井部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:不良 C:内外2.5Y8/2 灰白色			
4	須恵器	杯蓋	SC01 D区	①13.8 ②3.7	天井部外面回転ヘラケズリ 天井部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色 外N6/ 灰色			
5	須恵器	杯蓋	SC01 C区	①13.9 ②4.4	天井部外面回転ヘラケズリ 天井部内面不定方向ナデ一部当て具痕 他は回転ナデ 外面中位1条の沈線がめぐる	A:1mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:やや不良 C:内N7/ 灰白色 外N7/ 灰白色			
6	須恵器	杯蓋	SC01	①(14.0) ②3.5	天井部外面回転ヘラケズリ 天井部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ 外面中位1条の沈線がめぐる	A:1mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:やや不良 C:内N7/ 灰白色 外N8/ 灰白色			
7	須恵器	杯身	SC01 A区	①(11.7) ②4.1 受部径(14.0)	底部外面回転ヘラケズリ 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色 外N8/～N7/ 灰白色			
8	須恵器	杯身	SC01	①11.7 ②4.15 受部径14.2	底部外面回転ヘラケズリ 底部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:4mm以下の白色砂粒・微細な黒色砂粒を含む B:良好 C:内外5PB7/1 明青灰色			
9	須恵器	杯身	SC01	①12.2 ②4.15 受部径14.7	底部外面回転ヘラケズリ 底部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:4mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N5/ 灰色～N6/ 灰色 外N5/ 灰色～N7/ 灰白色		外面降灰 垂みあり	
10	須恵器	杯身	SC01 D区	①12.6 ②3.5 受部径14.6	底部外面回転ヘラケズリ 底部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:4mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N7/ 灰白色～N6/ 灰色		外面降灰 垂みあり	
11	須恵器	椀	SC01 C区	①(13.0) ②(6.9)	内外面回転ナデ 外面中位2条の沈線がめぐる	A:4mm以下の白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内外5PB5/1 青灰色～5PB6/1 青灰色		内外面降灰	
12	須恵器	椀	SC01 C区	①(13.0) ②9.3	体部外面下位回転ヘラケズリ 他は回転ナデ 外面中位2条の沈線がめぐる 外面中位穿孔あり	A:3mm以下の白色砂粒・長石を含む B:良好 C:内外5PB7/1 明青灰色～5PB3/1 暗青灰色		内面～外面上位降灰	
13	須恵器	高杯	SC01 D区	①(11.2) ②(3.2)	杯部底部外面回転ヘラケズリ 他は回転ナデ 外面中位～下位2条の沈線がめぐる 沈線間に連続刺突文を施す	A:2mm以下の白色・黒色砂粒・長石を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色～N6/ 灰色 外N5/ 灰色		内面降灰	
14	須恵器	高杯蓋	SC01 A区	①14.0 ②6.3 つまみ径3.6 つまみ高1.3	天井部外面カキメ 天井部内面一部当て具痕あり 他は回転ナデ 外面中位2条の沈線がめぐる	A:2mm以下の白色・黒色砂粒・長石を含む B:不良 C:内外2.5Y8/1 灰白色			
15	須恵器	高杯	SC01 C区	①(12.1) ②9.6 受部径(14.3) 脚部径10.0	杯部底部外面回転ヘラケズリ 杯部底部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色～N6/ 灰色 外N7/ 灰白色～ 2.5Y2/1 黒色		杯部外面、 脚部内面降灰	
16	須恵器	高杯	SC01 A区	②(8.7) 受部径15.0 脚部径11.2	杯部底部外面回転ヘラケズリ一部カキメ 杯部底部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:5mm以下の白色・黒色砂粒・長石を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N5/ 灰色～N4/ 灰色			
17	須恵器	高杯	SC01 A区	①(15.1) ②(6.1) 受部径(18.0)	杯部底部外面カキメ 他は回転ナデ	A:4mm以下の石英を含む B:不良 C:内外5PB6/1 青灰色		垂みあり	
18	須恵器	壺蓋	SC01 C区	①(8.6) ②(3.5)	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:やや不良 C:内7.5YR6/1 褐色 外7.5YR5/1 褐色			
19	須恵器	壺蓋	SC01	①5.3 ②4.3 受部径9.3 つまみ径3.0 つまみ高1.4	天井部外面回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内5Y7/1 灰白色 外5Y8/1 灰白色		外面降灰	
20	須恵器	壺蓋	SC01	①8.0 ②3.3	天井部外面ヘラ切り未調整 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N5/ 灰色			
21	須恵器	杯	SC01 D区	①(6.2) ②2.6	ナデ成形	A:微細な黒色砂粒を含む B:良好 C:内外N6/ 灰色			
22	須恵器	甕	SC01 C区	②(6.4)	内外面回転ナデ 外面波状文を施す	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内2.5GY5/1 オリーブ灰色 外N4/ 灰色			
23	須恵器	甕	SC01 C-Dベルト	①(20.1) ②(10.7)	体部外面擬格子叩き 体部内面同心円文当て具痕 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒・長石を含む B:良好 C:内外N4/ 灰色～N7/ 灰白色		口縁部内面降灰	
24	須恵器	軸着土器	SC01 C区		外面回転ヘラケズリ 内面回転ナデ	A:微細な砂粒を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外2.5GY4/1暗オリーブ灰色			
25	須恵器	切削物	SC01 D区	長さ1.3 幅2.5 厚さ0.8	ナデケズリ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外N6/ 灰色			
26	須恵器	切削物	SC01 D区 主柱穴	長さ1.3 幅2.15 厚さ0.75	ナデケズリ	A:微細な白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内外N6/ 灰色			
27	土師器	ミニチュア土器	SC01 D区	①3.6 ②2.8 ③2.2	ナデ成形	A:微細な白色・褐色砂粒・長石を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄褐色			
28	石製品	紡錘車	SC01 A-Bベルト	長さ3.7 最大幅1.9 厚さ1.7				滑石製	
29	須恵器	杯蓋	SC02 B区貼床	①(13.2) ②4.0	天井部外面回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	A:5mm以下の白色砂粒・長石を含む B:良好 C:内10YR7/1 灰白色 外7.5YR5/1 灰色			
30	須恵器	杯蓋	SC02	①(13.2) ②4.4	天井部外面回転ヘラケズリ 他は回転ナデ 外面中位1条の沈線がめぐる	A:2mm以下の白色・黒色砂粒・5mm以下の長石を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色 外N7/ 灰白色～7.5YR4/1 灰色		外面降灰	
31	須恵器	杯身	SC02 A区	①(13.2) ②(4.4) 受部径(15.8)	底部外面回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内N5/ 灰色 外N4/ 灰色		外面降灰	
32	須恵器	杯身	SC02	①(14.6) ②(3.8) 受部径(16.4)	底部外面回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:やや不良 C:内7.5YR7/3 に近い橙色 外10YR6/1 褐色			
33	須恵器	甕	SC02 B区	②(1.2)	内外面回転ナデ 外面波状文を施す	A:微細な砂粒を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色 外N6/ 灰色		内面降灰	
34	須恵器	高杯	SC02	②(14.1) 脚部径3.05 脚部径10.9	内外面回転ナデ 脚部外面下位カキメ 杯部外面連 続刺突文を施す 脚部外面中位2条の沈線がめぐる 脚部内面シヨリ痕あり 脚部3方向2段透かし	A:微細な白色砂粒・長石・雲母を含む B:良好 C:内外10YR7/1 灰白色			
35	須恵器	壺	SC02 カマド内	①(14.2) ②(14.2) ⑤(17.8) 受部径(16.3)	体部外面回転ヘラケズリ後カキメ 他は回転ナデ 頸部外面波状文を施す	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外N7/ 灰白色～N2/ 黒色		外面降灰	
36	須恵器	甕	SC02 カマド内	②(18.8) ⑤36.5 頸部径13.8	体部外面擬格子叩き一部カキメ 体部内面同心円文当て具痕	A:4mm以下の白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内N5/ 灰色 外N7/ 灰白色～N4/ 灰色			
37	須恵器	軸着土器	SC02 A区		甕内面同心円文当て具痕 杯内面当て具痕	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外N6/ 灰色～2.5Y6/2 灰黄色			
38	鉄製品	不明品	SC02 C区	残存長2.55 最大幅0.8 厚さ0.35 重さ2.2g					
39	須恵器	杯蓋	SC03	①(11.8) ②3.5	天井部外面回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	A:4mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N8/ 灰白色 外N3/ 暗灰色			
40	須恵器	杯身	SC03 A区	①(11.0) ②4.2 受部径(13.3)	底部外面回転ヘラケズリ 底部内面不定方向ナデ一 部当て具痕 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N5/ 灰色			
41	須恵器	軸着土器	SC03 B区		ナデ 回転ナデ 2条の沈線あり	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:N6/ 灰色～N4/ 灰色			
42	須恵器	器台	SC03 一段下げ	②(4.3)	外面下位擬格子叩き 外面2条の波状文と1条の沈線 がめぐる 内面同心円文当て具痕	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N5/ 灰色		内面降灰	
43	土師器	甕	SC03 B区	①(14.4) ②(4.9)	体部外面ハケメ 体部内面ケズリ 他はナデ	A:3mm以下の白色砂粒・長石・雲母を含む B:良好 C:内7.5YR4/2 褐色 外7.5YR5/3 に近い褐色			
44	鉄製品	不明品	SC03 一段下げ	残存長3.75 最大幅1.2 厚さ0.5 重さ6.6g					

第2表 遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径④高台径 ⑤最大径※(復元値)(残存値)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調			備考
						A:胎土	B:焼成	C:色調	
45	石製品	砥石	SC03 B区	残存長4.1 幅3.85 最大厚1.8					砂岩製
46	須恵器	杯蓋	SC04	①13.3 ②4.3	天井部外面回転ヘラズリ 他は回転ナデ	A:5mm以下の白色・黒色砂粒・長石を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N6/ 灰色～N5/ 灰色			
47	須恵器	杯蓋	SC04 A区	①13.3 ②3.9	天井部外面回転ヘラズリ 天井部内面当て具痕 他は回転ナデ 外面中位1条の沈線がめぐる	A:2mm以下の白色・黒色砂粒・5mm以下の長石を含む B:良好 C:内外N6/ 灰色			
48	須恵器	杯蓋	SC04A区 -SC06A区 ベルト	①(14.1) ②5.0	天井部外面回転ヘラズリ 天井部内面当て具痕 他は回転ナデ 外面中位1条の沈線がめぐる	A:1mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内外5B7/1 明青灰色～5B6/1 青灰色			歪みあり
49	須恵器	杯蓋	SC04 A区	①(14.8) ②4.2	天井部外面回転ヘラズリ 天井部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:不良 C:内10B6G/1 青灰色 外N7/ 灰白色			
50	須恵器	杯蓋	SC04 A区	①(14.8) ②4.2	天井部外面回転ヘラズリ 他は回転ナデ 外面中位1条の沈線がめぐる	A:4mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:やや軟質 C:内N6/ 灰色 外2.5Y6/1 黄灰色			
51	須恵器	杯身	SC04 A区	①(11.4) ②5.15 受部径13.8	底部外面回転ヘラズリ 底部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:微細な砂粒を含む B:良好 C:内外N7/ 灰白色			
52	須恵器	高杯蓋	SC04 A区	①(15.4) ②5.5 つまみ径 3.7 つまみ高1.25	天井部外面回転ヘラズリ 他は回転ナデ	A:4mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N5/ 灰色～N4/ 灰色			
53	須恵器	高杯	SC04 D区	②(4.5) 脚部径(12.0)	外面一部カキメ 他は回転ナデ 1ヶ所円孔あり	A:微細な白色砂粒を含む B:不良 C:内5YR7/4 に近い橙色 外7.5YR8/3 浅黄褐色			
54	須恵器	高杯	SC04 A区	②(10.1)	外面カキメ 内面ナデ 円形の3方向透かし	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内2.5Y6/1 黄灰色～N3/ 暗灰色 外5Y5/1 灰色			
55	須恵器	高杯	SC04 D区	②(11.9) 脚部径(5.35) 脚部径(18.4)	杯部内面当て具痕 他は回転ナデ 3方向透かし 脚部内面下位スサがめぐる	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内N3/ 暗灰色 外N4/ 灰色			
56	須恵器	瓶類	SC04 A区	①(11.0) ②(5.7)	内外面回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内2.5Y6/1 黄灰色～N3/ 暗灰色 外5Y5/1 灰色			内外面降灰
57	須恵器	提瓶	SC04 D区	②(6.3)	外面ヘラズリ後カキメ 内面ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内N3/ 暗灰色 外N4/ 灰色			
58	須恵器	甕	SC04 A区貼床	①(18.0) ②(4.7)	内外面回転ナデ	A:2mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色 外N7/ 灰白色～N6/ 灰色			
59	須恵器	甕	SC04 D区	②(24.6) ⑤(22.2) 頸部径(9.4)	体部外面撥格子叩き一部カキメ 体部内面同心円文当て具痕 頸部外面カキメ 頸部内面回転ナデ	A:微細な白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内外N7/ 灰白色～N4/ 灰色、5Y6/2 灰オリーブ色			底部内面、頸部 内面、体部外面 降灰 体部外面 上位自然釉
60	土師器	小壺	SC04 A区	①(7.4) ②(6.9)	内外面ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を多く含む B:良好 C:内外5YR6/8 褐色			
61	須恵器	杯蓋	SC05 B区	①(12.5) ②(4.1)	天井部外面回転ヘラズリ 他は回転ナデ 外面中位1条の沈線がめぐる 口縁部端部縄目痕あり	A:微細な砂粒を含む B:良好 C:内外N6/ 灰色			歪みあり
62	須恵器	杯蓋	SC05 A区	①(13.4) ②5.0	天井部外面回転ヘラズリ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N7/ 灰白色～N4/ 灰色			口縁部外面降灰
63	須恵器	杯身	SC05 A区	①(11.0) ②4.2 受部径13.0	底部外面回転ヘラズリ 底部内面当て具痕か 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:やや良好 C:内10YR7/1 灰白色 外2.5Y6/2 灰黄色～2.5Y7/1 灰白色～5Y5/1 灰色			別個体付着 重ね焼き痕あり 降灰
64	須恵器	杯身	SC05 B区	①11.1 ②4.45 受部径14.0	底部外面回転ヘラズリ 他は回転ナデ	A:4mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N6/ 灰色～N4/ 灰色			
65	須恵器	杯身	SC05 A-Bベルト	①(11.8) ②4.5 受部径(13.8)	底部外面回転ヘラズリ 底部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N5/ 灰色			外面降灰 歪みあり
66	須恵器	杯身	SC05 B区	①(12.2) ②4.6 受部径(15.0)	底部外面回転ヘラズリ 底部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N7/ 灰白色～N6/ 灰色			歪みあり
67	須恵器	高杯蓋	SC05 B区	①(10.8) ②4.4 つまみ径2.5 つまみ高0.7	内外面回転ナデか	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外7.5Y7/1 灰白色～7.5Y5/1 灰色			外面降灰
68	須恵器	高杯	SC05 B区	②(12.0) 脚部径(9.4)	脚部外面カキメ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外N5/ 灰色、N6/ 灰色、N8/ 灰白色			
69	須恵器	白	SC05 A区	②(9.0) ③12.0	底部外面回転ヘラズリ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒・長石を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色～N5/ 灰色 外N6/ 灰色、2.5Y4/2 暗 灰黄色、2.5Y8/3 淡黄色～N4/ 灰色			内外面一部降灰
70	須恵器	提瓶	SC05 B区	①(8.8) ②(6.25)	内外面回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、微細な黒色砂粒を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色～N6/ 灰色 外2.5GY6/1 オリーブ 灰色～N6/ 灰色			
71	須恵器	提瓶	SC05 A区	①(8.3) ②(7.35)	外面カキメ、回転ヘラズリ 内面回転ナデ	A:4mm以下の長石、微細な黒色粒を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色～2.5Y5/1 黄灰色 外10YR6/1 褐灰 色～2.5Y8/1 灰白色			口縁部内面～外 面降灰 口縁部外面自然 釉
72	須恵器	提瓶	SC05 A区	②(1.85)	ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:N6/ 灰色～N4/ 灰色			
73	須恵器	提瓶	SC05 B区	②(16.2)	外面カキメ 内面ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒・長石を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外5Y8/1 灰白色～N4/ 灰色			外面降灰
74	須恵器	器台	SC05 B区	②(4.4) ③(26.0)	内外面回転ナデ 外面透かし下に波状文を施す	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:軟質 C:内2.5Y7/1 灰白色 外2.5Y6/1 黄灰色			
75	須恵器	甕	SC05 B区	②(8.4)	外面撥格子叩き 内面同心円文当て具痕	A:1mm以下の白色・黒色砂粒を多く含む B:良好 C:内外N7/ 灰白色			
76	須恵器	甕	SC05 A区	①(25.0) ②(8.25)	肩部外面平行叩き 体部内面同心円文当て具痕 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色・茶色砂粒を含む B:良好 C:内 N7/ 灰白色～N6/ 灰色 外N8/ 灰白色～N7/ 灰白色			
77	須恵器	甕	SC05 A区	①(46.7) ②(20.0) 頸部径(31.7)	肩部外面撥格子叩き 体部内面同心円文当て具痕 他は回転ナデ 頸部外面2条と3条の沈線間に波状文を施す	A:3mm以下の白色・黒色砂粒・長石、雲母を含む B:良好 C:内2.5Y7/1 灰白色～N5/ 灰色 外N4/ 灰 色～N5/ 灰色			
78	土師器	壺	SC05 B区	②(7.6) 頸部径(6.0)	内外面ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内5Y6/6 褐色 外2.5YR5/8 明赤褐色、5YR6/6 褐色			
79	土師器	甕	SC05 B区	①(14.0) ②(11.4)	体部外面ナデ 体部内面ケズリ	A:4mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内5YR7/1 灰白色 外2.5Y5/6 明赤褐色			
80	土師器	杯	SC05 B区	①(16.2) ②(3.1)	底部外面ヘラ切り 他は回転ナデ	A:5mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
81	須恵器	杯蓋	SC06 D区	①(13.0) ②4.1	天井部外面回転ヘラズリ 天井部内面当て具痕 他は回転ナデ 外面中位1条の沈線がめぐる	A:1mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N7/ 灰白色			
82	須恵器	杯蓋	SC06	①(14.3) ②5.4	天井部外面回転ヘラズリ 天井部内面当て具痕 他は回転ナデ 外面中位1条の沈線がめぐる	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外N6/ 灰色			歪み著しい
83	須恵器	杯蓋	SC06	①14.2 ②3.7	天井部外面回転ヘラズリ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:不良 C:内外10YR8/3 浅黄褐色、2.5YR6/3 に近い橙色			
84	須恵器	杯蓋	SC06	①14.4 ②4.25	天井部外面回転ヘラズリ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:不良 C:内外5YR7/6 褐色、7.5YR8/4 浅黄褐色			
85	須恵器	杯身	SC06 D区	①(11.4) ②4.9 受部径(13.7)	底部外面回転ヘラズリ 底部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒・長石、石英を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外2.5Y7/1 灰白色～2.5Y6/1 黄灰色			外面別個体付着
86	須恵器	杯身	SC06	①(12.0) ②5.0 受部径(14.4)	底部外面回転ヘラズリ 底部内面当て具痕 他は回転ナデ 底部外面ヘラ記号あり	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:やや軟質 C:内外5B7/1 明青灰色			

第3表 遺物観察表③

遺物番号	種類	器種	出土地点	質量 (cm・g) ①口径②器高③底径④高台径 ⑤最大径※(復元値)(残存値)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調			備考
						A:胎土	B:焼成	C:色調	
87	須恵器	杯身	SC06 C区	①12.9 ②5.0 受部径14.7	底部外面中央へラ切り 底部外面回転へラズリ 底部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内N6/ 灰色 外N6/ 灰色~2.5Y7/1 灰白色		外面降灰 外面別個体付着	
88	須恵器	椀	SC06 A・Dベルト	①13.0 ②7.5	底部外面回転へラズリ 他は回転ナデ 外面中位2条の沈線がめぐる	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外N5/ 灰色		内面降灰	
89	土師器	高杯蓋	SC06 調査区壁	①(13.5) ②4.9 つまみ径2.3 つまみ高0.9	天井部外面回転へラズリ 他は回転ナデ 外面中位1条の沈線がめぐる	A:3mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒を含む B:良好 C:内2.5YR5/2 灰赤色 外5YR5/1 褐灰色~5YR5/2 灰褐色			
90	須恵器	高杯蓋	SC06 A区	①(13.3) ②(4.4)	天井部外面カキメ 他は回転ナデ	A:4mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N5/ 灰色 外N5/ 灰色~N3/ 暗灰色		外面降灰	
91	須恵器	高杯	SC06 C区	②(6.8) 脚部径(12.0)	杯部内面当て具痕 脚部外面カキメ 他は回転ナデ 脚部外面1条の沈線がめぐる	A:2mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒を含む B:良好 C:内外N6/ 灰色			
92	須恵器	高杯	SC06	①15.9 ②14.65 脚部径(11.7)	杯部底部外面、脚部外面下位カキメ 杯部底部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:微細な白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内外2.5Y7/2 灰黄色			
93	須恵器	壺	SC06 カマド埋土	①(13.0) ②(3.65)	外面波状文を施す 内面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内N6/ 灰色~5Y6/1 灰色 外N5/ 灰色		内面降灰	
94	須恵器	蓋	SC06 C区	①5.1 ②3.4 受部径8.1 つまみ径3.2 つまみ高0.7	天井部外面カキメ 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内N6/ 灰色~N3/ 暗灰色		内外面降灰	
95	須恵器	壺	SC06 C区	②(8.1) ⑤(12.0)	外面調整不明 内面回転ナデ 外面2条の沈線がめぐる	A:4mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内外7.5YR7/4 にふい橙色		赤焼土器	
96	須恵器	不明 脚部	SC06 清掃	②(3.0) 脚部径(17.1)	内外面回転ナデ	A:4mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内10YR7/4 にふい黄褐色~10YR3/1 黒褐色 外 5YR6/6 褐色		内面降灰	
97	須恵器	器台	SC06 調査区壁	①(33.4) ②(7.7)	外面カキメ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内2.5Y7/1 灰白色~N6/ 灰色 外N5/ 灰色		内面降灰	
98	土師器	甕	SC06	①(16.4) ②(14.5)	体部内面ケズリ 他はヨコナデ	A:微細な白色・黒色砂粒と雲母、5mm以下の長石、石英 を多く含む B:良好 C:内7.5YR7/4 にふい橙色、7.5YR4/2 灰褐色 外 2.5YR7/6 褐色、7.5YR7/4 にふい橙色			
99	土師器	甕	SC06	①(21.0) ②(32.5) ⑤(28.7)	体部外面ハケメ 体部内面ケズリ 他はヨコナデ	A:4mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を含む B:良好 C:内10YR6/3 にふい黄褐色 外7.5YR7/4 にふい赤褐色~5YR3/1 黒褐色			
100	土師器	甕	SC06	①(19.0) ②(27.4) ⑤(29.0)	体部外面ハケメ 体部内面ケズリ 他はヨコナデ	A:4mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を含む B:良好 C:内5YR7/6 褐色 外5YR5/4 にふい赤褐 色~5YR3/1 黒褐色		外面煤付着	
101	石製品	不明品	SC06 D区	長さ2.45 幅2.2 厚さ0.4					
102	鉄製品	不明品	SC06 D区	長さ9.8 幅6.2 重さ33.0					
103	須恵器	杯蓋	SC07	①(12.3) ②(3.4)	天井部外面回転へラズリ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、石英、雲母を含む B:良好 C:内N7/ 灰白色 外N7/ 灰白色~N3/ 暗灰色			
104	土師器	椀	SK01	②(1.45) ④(6.6)	内外面回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内外7.5YR8/6 浅黄褐色~10YR8/3 浅黄褐色			
105	土製品	棒状土 製品	SK01	残存長2.55 最大幅2.95 厚さ2.0	ナデ成形	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:10YR7/3 にふ い黄褐色~7.5YR6/6 褐色、10YR4/1 褐灰色		煤付着	
106	黒色土器 B	椀	SK03	②(2.8)	内外面ミガキ	A:1mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内10YR3/2 黒褐色 外10YR2/1 黒色			
107	土師器	小皿	SK04	①10.0 ②1.3	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄褐色			
108	土師器	小皿	SK04	①10.0 ②1.2 ③7.6	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:2mm以下の白色砂粒、長石、石英を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄褐色			
109	土師器	小皿	SK04	①(10.0) ②1.2 ③(7.8)	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:2mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄褐色			
110	土師器	小皿	SK04	①10.0 ②1.2 ③7.75	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:2mm以下の白色・褐色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄褐色			
111	土師器	小皿	SK04	①10.3 ②1.2	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄褐色			
112	土師器	小皿	SK04	①10.8 ②1.4 ③7.7	底部外面へラ切り 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色・褐色砂粒を含む B:良好 C:内外7.5YR8/3 浅黄褐色			
113	土師器	小皿	SK04	①10.3 ②1.2 ③7.4	底部外面へラ切り 底部内面不定方向ナデ 他は回 転ナデ 底部内面工具痕、底部外面板状圧痕あり	A:1mm以下の白色砂粒を少し含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
114	土師器	小皿	SK04	①10.4 ②1.3 ③8.0	底部外面へラ切り 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄褐色			
115	土師器	小皿	SK04	①10.4 ②1.3 ③8.0	底部外面へラ切り 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
116	土師器	小皿	SK04	①10.8 ②1.3 ③7.2	底部外面へラ切り 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:1mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色~10YR7/2 灰白色		底部内外面黒斑	
117	土師器	小皿	SK04	①10.3 ②1.2	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
118	土師器	小皿	SK04	①(10.8) ②1.3 ③(8.0)	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色~10YR5/1 褐灰色			
119	土師器	小皿	SK04	①11.0 ②1.3	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
120	土師器	丸底杯	SK04	①(14.6) ②(3.8)	底部外面へラ切り 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 底部外面板状圧痕あり	A:4mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内外10YR7/2 にふい黄褐色、10YR6/1 褐灰色			
121	土師器	丸底杯	SK04	①15.2 ②3.25	底部外面へラ切り後ナデ 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR8/2 灰白色 外10YR8/3 浅黄褐色			
122	土師器	丸底杯	SK04	①(15.2) ②(3.3)	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ	A:3mm以下の白色・褐色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄褐色			
123	土師器	丸底杯	SK04	①15.4 ②3.7	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 底部外面板状圧痕あり 内面コテ当て痕あり	A:3mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
124	土師器	丸底杯	SK04	①(15.4) ②3.2	底部外面へラ切り後ナデ 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 底部外面板状圧痕あり	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
125	土師器	丸底杯	SK04	①(15.5) ②3.4	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 底部外面板状圧痕あり	A:4mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
126	土師器	丸底杯	SK04	①(15.6) ②3.35	底部外面へラ切り後ナデ 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 底部外面板状圧痕あり 内面コテ当て痕あり	A:1mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内10YR8/3 浅黄褐色 外10YR8/2 灰白色			
127	土師器	丸底杯	SK04	①16.0 ②3.4	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 底部外面板状圧痕あり 内面コテ当て痕あり	A:4mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
128	土師器	丸底杯	SK04	①15.6 ②3.8	底部外面へラ切り後ナデ 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 底部外面板状圧痕あり 内面コテ当て痕あり	A:2mm以下の白色・褐色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄褐色			

第4表 遺物観察表④

遺物番号	種類	器種	出土地点	質量 (cm・g) ①口径②器高③底径④高台径 ⑤最大径※(復元値) (残存値)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調			備考
129	土師器	丸底杯	SK04	①15.8 ②(3.4)	底部外面へラ切り 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 内面コテ当て痕あり	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
130	土師器	丸底杯	SK04	①15.8 ②3.5	底部外面へラ切り後ナデ 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 底部外面板状圧痕あり 内面コテ当て痕あり	A:4mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内 10YR8/2 灰白色 外5YR7/6 褐色～10YR8/2 灰白色			
131	土師器	丸底杯	SK04	①15.8 ②3.6	底部外面へラ切り後ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 内面コテ当て痕あり	A:2mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
132	土師器	丸底杯	SK04	①15.9 ②3.4	底部外面へラ切り後ナデ 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 内面コテ当て痕あり	A:5mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
133	土師器	丸底杯	SK04	①15.6 ②3.2	底部外面へラ切り後ナデ 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 底部外面板状圧痕あり 内面コテ当て痕あり	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色		歪みあり	
134	土師器	丸底杯	SK04	①(16.0) ②3.5	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 底部外面板状圧痕あり 内面コテ当て痕あり	A:2mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
135	土師器	丸底杯	SK04	①(16.1) ②3.4	底部外面へラ切り後ナデ 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 底部外面板状圧痕あり	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
136	土師器	丸底杯	SK04	①(16.0) ②3.35	底部外面へラ切り後ナデ 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 底部外面板状圧痕あり	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
137	土師器	丸底杯	SK04	①16.0 ②3.7	底部外面へラ切り 内面調整不明 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 底部外面板状圧痕あり	A:1mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色～7.5YR8/3 浅黄褐色		歪みあり	
138	土師器	丸底杯	SK04	①(16.2) ②3.2	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ	A:4mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
139	土師器	丸底杯	SK04	①16.2 ②3.5	底部外面へラ切り後ナデ 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 内面コテ当て痕あり	A:2mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/3 浅黄褐色			
140	土師器	丸底杯	SK04	①(16.3) ②(3.4)	底部外面へラ切り後ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 内面ハケ状痕あり	A:2mm以下の白色砂粒、雲母を多く含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
141	土師器	丸底杯	SK04	①16.4 ②(3.5)	底部外面へラ切り後ナデ 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 内面ハケ状痕あり	A:4mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色			
142	土師器	椀	SK04	①(16.0) ②4.8 ④7.8	内面調整不明 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 内面コテ当て痕あり	A:3mm以下の長石、雲母を含む B:やや良好 C:内外7.5YR8/3 浅黄褐色			
143	黒色土器 A	丸底杯	SK04	①15.3 ②3.5	底部外面へラ切り後ナデ 底部内面ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 内面コテ当て痕あり	A:5mm以下の砂粒を含む B:良好 C:内10YR4/1 褐 灰色 外10YR8/2 灰白色～7.5YR8/4 浅黄褐色			
144	黒色土器 A	丸底杯	SK04	①(15.0) ②3.3	底部外面へラ切り 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 底部外面板状圧痕あり 内面コテ当て痕あり	A:6mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR2/1 黒色 外2.5YR7/6 褐色、10YR7/3 にぶ い黄褐色			
145	黒色土器 A	椀	SK04	①14.4 ②6.2 ④7.1	底部外面へラ切り 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ	A:微細な白色砂粒を含む B:やや良好 C:内外7.5YR8/3 浅黄褐色～7.5YR5/1 褐色		歪みあり	
146	黒色土器 A	椀	SK04	①(15.0) ②5.7 ④7.1	内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 底部外面板状圧痕あり	A:1mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:やや良好 C:内10YR8/2 灰白色～10YR3/1 黒褐色 外10YR8/3 浅黄褐色			
147	黒色土器 A	椀	SK04	①16.0 ②6.2 ④6.4	内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ	A:微細な白色砂粒を含む B:やや良好 C:内外10YR7/2 にぶい黄褐色～10YR3/1 黒褐色			
148	黒色土器 A	椀	SK04	①16.0 ②5.55 ④7.4	底部外面へラ切り後ナデ 内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 内面コテ当て痕あり	A:微細な白色砂粒、雲母を含む B:やや良好 C:内外2.5YR8/2 灰白色～7.5YR2/1 黒色		外面黒斑あり	
149	黒色土器 A	椀	SK04	①16.0 ②6.05 ④6.5	内面ミガキ 他は回転ナデ 体部外面下位指オサエ 内面コテ当て痕あり	A:1mm以下の白色・褐色粒、長石、雲母を含む B:不良 C:内10YR8/2 灰白色～10YR4/1 褐色 外10YR8/2 灰白色			
150	黒色土器 B	椀	SK04	①(14.2) ②5.5 ④6.5	内外面ミガキ? 高台部回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外5YR3/1 黒褐色			
151	黒色土器 B	椀	SK04	①(15.6) ②5.5 ④(5.9)	内外面ミガキ一部指オサエ 高台部回転ナデ 高台部端部圧痕あり	A:微細な白色砂粒、3mm以下の長石を含む B:良好 C:内7.5YR3/1 黒褐色 外7.5YR7/2 明褐色～ 7.5YR2/1 黒色			
152	須恵器	杯身	SK07	①11.9 ②4.95 受部径14.3	底部外面回転ヘラズリ 底部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:3mm以下の白色砂粒、長石、雲母を含む B:良好 C:内外N7/ 灰白色～N5/ 灰色			
153	須恵器	甕	SP27	②(13.7)	外面平行叩き 内面同心円文当て具痕	A:微細な白色砂粒、褐色粒を含む B:不良 C:内外7.5YR8/3 浅黄褐色			
154	須恵器	小壺	調査区南側 一段下げ	①(5.6) ②(4.4)	内外面回転ナデ	A:1mm以下の白色・黒色砂粒を少し含む B:良好 C:内外5PB6/1 青灰色			
155	須恵器	不明品	調査区南側 一段下げ	残存長2.7 最大幅3.7 最大厚1.6	内外面ナデ	A:微細な白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:N5/ 灰色			
156	土師質土器	移動式 カマド	調査区南側 一段下げ	残存長9.9 最大幅7.6 最大厚3.2	外面平行叩き 内面同心円文当て具痕	A:5mm以下の白色砂粒、長石、石英、雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色 外7.5YR8/4 浅黄褐色			
157	土師器	ミニチュ ア土器	調査区南側 一段下げ	②(1.3)	内外面ナデ	A:6mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:内外10YR7/3 にぶい黄褐色			
158	須恵器	杯蓋	表土剥ぎ	①12.5 ②4.6	天井部外面中央へラ切り 天井部外面回転ヘラズリ 天井部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内 N6/ 灰色 外5Y7/1 灰白色～N6/ 灰色～N3/ 暗灰色		外面降灰 歪みあり	
159	須恵器	杯蓋	表土剥ぎ	①15.0 ②(4.4)	天井部外面回転ヘラズリ 天井部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:軟質 C:内外N6/ 灰色～7.5Y6/1 灰色		外面付着物あり	
160	須恵器	杯身	SC06調査 区壁	①11.75 ②4.3 受部径14.0	底部外面回転ヘラズリ 他は回転ナデ	A:微細な白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内外N6/ 灰色		外面やや降灰 歪みあり	
161	須恵器	杯身	表土剥ぎ	最大口径14.95 ②(4.2) 受部径15.95	内外面回転ナデ	A:2mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:やや良好 C:内N4/ 灰色 外5Y8/2 灰白色～N5/ 灰色		外面降灰 歪み著しい	
162	須恵器	高杯	表土剥ぎ	②(5.8) 脚部径(10.6)	杯部底部内面当て具痕 他は回転ナデ 脚部内面シボリ痕あり	A:3mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内 5Y8/2 灰白色、N4/ 灰色 外N7/ 灰白色、N3/ 暗灰色		内外面降灰	
163	須恵器	器台	表土剥ぎ	②(9.3)	外面2条ずつの沈線あり、波状文を施す 内面ナデ 透かしあり	A:微細な白色砂粒を少し含む B:軟質 C:内外10YR7/1 灰白色			
164	須恵器	甕	表土剥ぎ	②(6.6)	外面2条の沈線間に波状文を施す 内面回転ナデ	A:3mm以下の長石を含む B:良好 C:内外5Y6/1 灰色 外N7/ 灰白色～N4/ 灰色		内外面降灰、 自然釉	
165	土師器	甕	表土剥ぎ	②(13.5) ③(10.3)	外面ハケム 内面ケズリ	A:微細な白色・黒色砂粒、雲母、5mm以下の長石類を含 む B:良好 C:内7.5YR7/3 にぶい褐色 外7.5YR7/6 褐色～7.5YR5/3 にぶい褐色			
166	須恵器	杯蓋	野添12号窯 跡灰原B区	①(13.4) ②3.8	天井部外面回転ヘラズリ 天井部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内外N5/ 灰色		内外面降灰、 自然釉	
167	須恵器	杯蓋	野添12号窯 跡東西ト レンチ	①(13.4) ②3.7	天井部外面回転ヘラズリ 天井部内面当て具痕 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒、長石を含む B:良好 C:内外N6/ 灰色			

IV. 総括

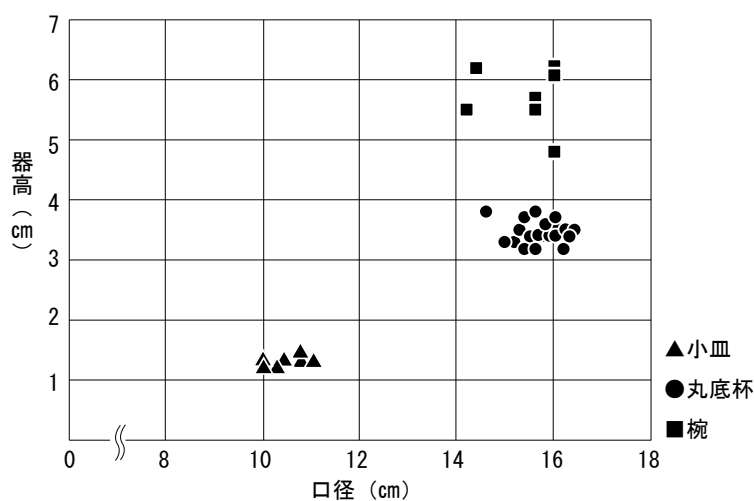
1. 遺跡の位置付け

(1) 各遺構の位置付け

古墳時代 当該期の遺構はSC01～07、SK07が該当する。須恵器蓋杯の時期から、牛頸編年ⅢA～ⅢB期にあたり、6世紀中頃から後半に位置付けられる。ⅢA期の蓋杯はSC04から出土しており、天井が高く丸みを帯びる杯蓋（第12図48）や立ち上がりが高く深みのある杯身（第12図51）などが該当するが、数量は少なく客体的である。主体をなすのはⅢB期の蓋杯である。当該期の蓋杯は、天井部あるいは底部が平坦なものである。これらは口縁部に段を有するものと丸くおさめるものがある。また、杯蓋には天井部と体部の境に廻る稜線あるいは沈線の有無が認められる。型式学的には有段・有稜のものが古式の様相とされているが、混在して出土している。ⅢB期の蓋杯は、SC01～07、SK07で確認された。これらを踏まえると、SC04はⅢA～ⅢB期（6世紀中頃～後半）、SC01～03・05・06およびSK07はⅢB期（6世紀後半）に位置付けられる。

また、遺構の切り合いからはSC07→SC01、SC04→SC06→SC05の先後関係を確認できる。特に調査区南側の竪穴建物で最初に造られたSC04はⅢA期の遺物を含むことから、遺物の位置付けと矛盾はない。またカマドの敷設位置からみると、当該地で最も古いSC04のみ西壁にカマドを設け、その他判明しているものについては、すべて北壁に設置していることから、カマド敷設位置には時期的変移が想定される。なお、ⅢB期の竪穴建物の廃絶以降平安時代まで遺構の展開は認められず、包含層からⅣA期の須恵器類が少量出土するのみである。

既往の調査状況からみると、上園遺跡2次調査地において5世紀後半の竪穴建物が1軒確認できるものの、竪穴建物が複数展開し、集落が拡大をみせるのは6世紀中頃から後半である。こうした集落は、上園遺跡の西側丘陵部に所在し、牛頸開窯期の窯として知られる本堂遺跡14次の窯跡や野添6号窯跡の操業に関わるものと考えられている。後述するように、今回確



第25図 SK04出土供膳具法量分布図

認した集落も須恵器生産に関わる可能性が高く、須恵器生産の開始と集落の拡大が密接に関連することを本調査でも追認できたと言える。

平安時代 当該期の遺構は、SK01・03・04があるほか、遺物が小片のために報告を見送ったSK02・05やピットの多くも当該期の遺構とみられる。特筆すべきはSK04出土土器群である。本遺構からは土師器・黒色

土器の供膳具が折り重なって出土し、一括廃棄が想定される。器種は小皿・丸底杯・椀からなり、第25図の法量分布図が示すとおり、小皿と丸底杯の法量はまとまりをみせる。法量の平均値をみると、小皿は口径10.4cm、器高1.3cm、丸底杯は口径15.7cm、器高3.5cmを測り、小皿・丸底杯ともにすべて底部ヘラ切りである。山本信夫氏による編年に照らすと、XI期（11世紀中頃）に相当する。椀類は、中島恒次郎氏の分類に従うと、黒色土器A・B類ともに椀Ⅲ－4類に対応する。これらは、山本編年XI期に相当し、小皿や丸底杯との時期的矛盾は認められない。

以上のことから、SX04の遺物は当該期の良好な一括資料と位置付けられる。なお、上園遺跡では11世紀後半から12世紀にかけて集落が拡大する。当該期には焼き歪んだ瓦器や窯道具とみられる土製品が出土することから、土器作りの村として発展したとみられるが、今回の調査地内では、土器生産関連の遺構や遺物はほとんど認められなかった。

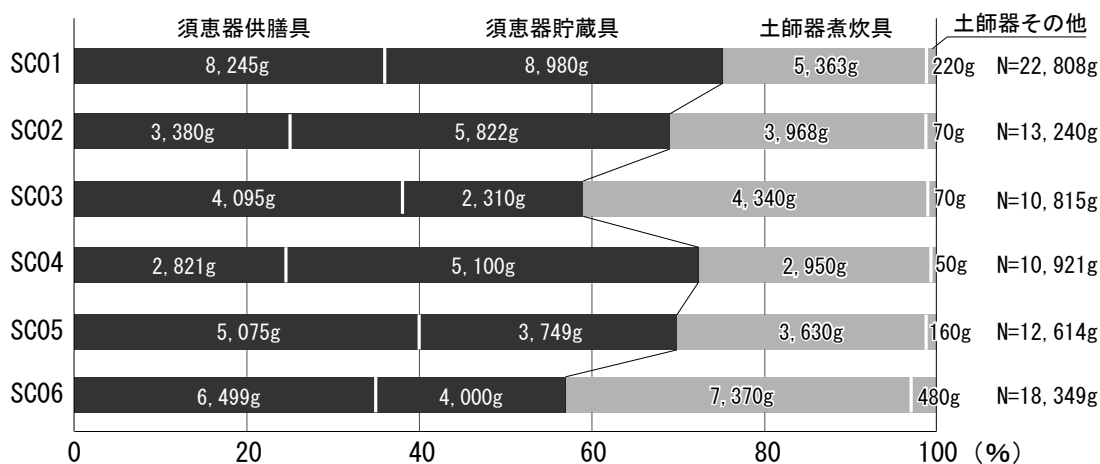
（2）須恵器工人集落に関する基礎的検討

上園遺跡は、既往の調査成果から牛頸窯跡群開窯期の工人集落と考えられている。太田智氏は牛頸窯跡群の須恵器工人集落を類型化する中で、工人集落を認定する諸要素を以下のとおり提示した（太田2015）。①ロクロピット、②粘土の存在、③切削物、④生産道具（叩き板・当て具など）、⑤失敗品、⑥須恵器の量（支群全体で8割）。こうした要素をより多く認めることのできる集落については、須恵器工人集落として位置付けが可能であるとした。

ここでは上記の要素に着目しながら、本調査地点が工人集落として位置付け可能か否かを明らかにしたい。今回の調査では、①・②・④は確認できていないため、③・⑤・⑥の要素について検討する。

切削物 切削物とは、甕などの成形時に不要な部分を削り取ったものである。窯道具やテストピースとしての役割が指摘されており、須恵器生産との関わりを示す遺物である。SC01から2点出土しており、いずれも須恵質を呈している（第6図25・26）。

失敗品 失敗品については客観的数値を示すことができなかったが、焼成時の割れや焼き歪み、



第26図 竪穴建物出土土器比率図

釉着が認められる資料も一定量存在する。

須恵器の量 基礎的なデータの収集に努めるため、各竪穴建物で出土した須恵器と土師器の量比を検討した。竪穴建物から出土したすべての土器を対象とし、図示していないものも含む。器種は細かく分類せず、須恵器は供膳具（蓋杯・高杯など）と貯蔵具（壺・甕など）、土師器は煮炊具（甕・甑）とその他（杯・壺など）に大別した。また、破片が多く時期の細分は困難なことから、時期を踏まえた分類は行っていない。計測方法については重量計測を選択した。

結果は第26図に示すとおりである。全体を検出したSC01・02は、須恵器7割・土師器3割と須恵器が優勢を占める。部分的な検出に留まった他の建物についても、須恵器は6～7割を示している。太田氏が示した8割には満たないものの、須恵器が優位であることが分かる。また、一個体の重量が重い貯蔵具が主体を占めるものと想定されたが、実態としては杯類が高い割合を示す場合が多い。当該期の杯蓋・杯身が一個体あたり250～300gである点から勘案すると、個体数としては供膳具が卓越しているとみてよいだろう。一方、土師器は煮炊具が圧倒的に優勢を示し、用途による土師器・須恵器の明確な使い分けがなされていたことが分かる。

なお、大野城市において須恵器と土師器の量比に関する分析はなく、比較すべきデータがない。従って、この数値が須恵器工人集落特有のものであるか、直ちに判断は下しかねる。今後同様の検討を進め、基礎的データの収集に努める必要があるだろう。

小結 以上のとおり、太田氏が指摘した③・⑤・⑥の項目が認められ、須恵器工人集落としての要素を備えている点は首肯できよう。ただし、粘土やロクロピットといった須恵器生産を直接的に示す痕跡は確認できないことから、製陶を行うような場所ではなく、工人の居住域と製品の二次的な選別や集積を兼ねる場所であった可能性が高い。割れや焼き歪みといった失敗品を含むほか、通常集落ではあまり出土しない壺や器台といった特殊品も存在する点は、上記の想定を支持する痕跡と評価できる。

2. 平行文当て具痕を有する須恵器杯類について

SC06から出土した須恵器杯身（第17図86）は、内面に平行文当て具の痕跡が残る。6世紀後半の蓋杯の内面には、同心円文の当て具痕が残るのが一般的であり、平行文当て具痕は極めて客体的な存在と言える。内面に平行文当て具痕を有する須恵器は、寺井誠氏により6世紀後半から7世紀にかけて北部九州一帯に分布することが明らかにされている（寺井2008など）。器種は甕が最も多く、その他に甑や壺もあり、蓋杯や高杯は少数のようである。

福岡平野における出土例 平行文当て具痕を有する杯類について、福岡平野における出土例を確認すると、管見の限り10遺跡22点が知られる（第5表）。生産窯は雉子ヶ尾窯跡と野添12号窯跡の2か所で、いずれも大野城市に所在する。雉子ヶ尾窯跡は大野城市東部の乙金地区に位置し、昭和48年の調査においてⅢB期の窯跡が3基確認された。平行文当て具痕を有する蓋杯は1・2号窯で出土しており、1号窯跡では内面に平行文当て具痕を有する把手付の平底甕も確認されている。これらは近年認識されたもので、未報告資料として紹介された（上田編2016）。出土資料の全容は把握できていないが、同心円文当て具が主体を占めつつ、平行文も

第5表 平行文当て具痕を有する須恵器杯類一覧

No	遺跡名	遺構	所在地	時期	杯蓋	杯身	高杯	備考	出典
1	元岡・桑原遺跡群第49次・51次	5-2区IVe層	福岡市西区元岡	ⅢB		1			福岡市1173集
2	重留村下遺跡第1次	SC08	福岡市早良区重留1丁目	ⅢB		2			福岡市510集
3	中村町遺跡第1次	SC07	福岡市南区野間3丁目	ⅢB		1			福岡市373集
4	雉子ヶ尾窯跡	1号窯	大野城市大城3丁目	ⅢB	1	1		内面平行当て具の把手付平底甕あり	大野城市136集
5		2号窯		ⅢB	1	1			
6	雉子ヶ尾古墳		大野城市大城3丁目	ⅢB	1	1		雉子ヶ尾窯跡からの流れ込み	
7	薬師の森遺跡第7次	SC04	大野城市乙金3丁目	ⅢB	2				大野城市120集
8	薬師の森遺跡第17次	SC01	大野城市乙金3丁目	ⅢB			1	高杯蓋	大野城市106集
9		SC02		ⅢB	1				
10	上園遺跡第17次	SC06	大野城市上大利3丁目	ⅢB		1			本報告書
11	牛頸野添窯跡群	12号窯跡	大野城市南大利2丁目	ⅢB	2				本報告書
12	九州大学筑紫キャンパス遺跡群 (御供田遺跡)	SB214	春日市春日公園6丁目	ⅢB		1			九州大学埋文調査室 (筑紫地区遺跡群 第3冊)
13		SB226		ⅢB			1	有蓋高杯	
14		SX402灰原		ⅢB		1			
15		SB225		ⅣA	1				
16	大宰府史跡169-2次	上層整地層	太宰府市観世音寺3丁目	?		1		口縁部を欠き、時期不明	大宰府史跡H9概報

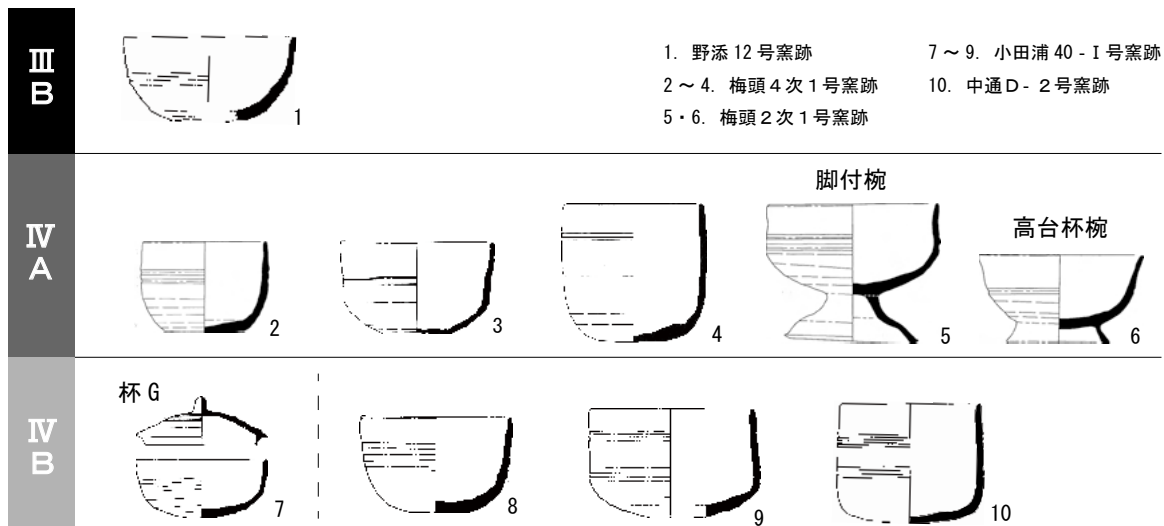
一定量存在するようである。周辺の集落に目を向けると、窯から北へ約600mの大野城市薬師の森遺跡から出土しており、雉子ヶ尾窯跡からの供給が想定される。

一方牛頸窯跡群では、平行文当て具痕を有する蓋杯は確認されていなかったが、近年上田龍児氏が存在に言及している（上田2021）。今回、野添12号窯跡において杯蓋を2点確認した。詳細については、V章を参照されたい。出土資料全点を点検してはいないものの、同心円文当て具が圧倒的に多く、平行文はかなり客体的とみられる。時期はⅢB期に位置付けられる。今回報告した上園遺跡17次調査地から南へ約700mの位置にあり、需給関係が想定される。また、牛頸窯跡群域に含まれる九州大学筑紫キャンパス遺跡群からもⅢB～ⅣA期の蓋杯や高杯が出土しており、窯跡との関連が示唆される。その他、福岡市南区の中村町遺跡や福岡市早良区の重留村下遺跡では、ⅢB期の所産とみられる杯身が出土している。どちらも周囲に生産地は確認されていない。

時期と分布の傾向 出土事例をみると、平行文当て具痕を有する蓋杯の時期は、概ねⅢB期（6世紀後半）に収まるようである。当該期を境に同心円文当て具痕も減少することから、平行文当て具痕も同様の変遷をたどるのだろう。分布傾向をみると、生産地と消費地が近接するパターン（乙金地区・牛頸窯跡群周辺）と生産地不在のパターン（福岡市中村町遺跡・重留村下遺跡など）がある。前者は従来から新羅・加耶系渡来人の存在が指摘されている地域であり、土器作りへの関与も想定されている（上田2021）。前者のうち、乙金地区では平行文当て具痕を残す軟質系土器（須恵器的技法で製作された土師器）が多く出土することからも、こうした想定を指示する。後者については、大野城市域からの搬入の可能性もあるが、福岡市元岡・桑原遺跡群をはじめ福岡市西部地域においても平行文当て具痕を有する須恵器（主に甕）や軟質系土器が集中することから、この地域との関わりも視野に入れるべきであろう。

3. 須恵器碗について

SC01およびSC06からは、体部下半が丸みを帯び、外面中位に2条の沈線が廻る須恵器が出土した（第5図11・12、第17図88）。これらは一般的に「碗」と呼ばれるもので、供膳具の一種として認識されており、牛頸窯跡群においても普遍的に出土する器種である。寺井誠氏は、



第27図 牛頸窯跡群における須恵器碗の変遷 (1/6)

牛頸窯跡群出土の高台付碗を検討し、金属器を模倣した陶質土器に倣って製作されたものであると指摘した(寺井2012)。このほかに牛頸窯跡群における碗に関する専論はなく、特に高台の付かないオーソドックスなものは変遷等不明確な部分が多い。そこで本稿では、牛頸窯跡群における須恵器碗の時期的変遷に主眼を置き、検討を行う。

ⅢB期 牛頸窯跡群はⅢA期から操業を開始するが、碗の生産が認められるのはⅢB期からである。窯に伴う資料としては野添12号窯跡例が最も古い(第27図1)。底部付近は回転ヘラケズリされ、丸みを帯びる。体部は内湾気味にのび、中位には2条の沈線が廻る。同時期に位置付けられる本調査出土例と形態的に類似する。

ⅣA期 当該期は窯の数が増加し、生産の拡大期にあたる。いずれの窯においても、碗の生産は普遍的に認められるが、生産量全体に占める割合は低い。形態・法量ともバリエーションに富むが、最も多いものは、底部付近が回転ヘラケズリされて丸みを帯び、体部は直線的あるいは内湾気味にのびるものである。外面には沈線が廻るものに加え、カキメを施すものもある。内面に降灰が認められるものが多いことや、セットになりそうな蓋が存在しないことから、基本的には無蓋器種とみられる。また、口径に対して器高が異様に高い一群があり(第27図4)、これらは前述のものとは異なる型式(系譜)に位置付けられる可能性が考えられる。加えて、碗から派生したとみられる脚付き碗や高台付碗の生産が始まるのもこの時期である。

ⅣB期 前代に引き続き、碗は普遍的に生産されている。形態・技法ともに前代との明確な差異は見出しがたい。当該期には、かえりを有する蓋とセットになる杯Gが普遍的に出土するようになる。これらは体部下半が丸みを帯び、外面中位には沈線が廻ることから、碗との形態的類似性は高いものの、有蓋器種という点で異なる。杯Gの蓋・身がセットで出土した小田浦窯跡群40-I号窯の資料をみると、杯Gは口径10cm台にまとまるのに対し、碗は口径12cmと大振りであり蓋は伴わないことから、杯Gと碗は明確に作り分けられていたとみられる。

Ⅴ期 当該期は窯が減少する時期にあたり、現状では窯跡に伴う事例を見出せない。続くⅥ期の窯跡資料には碗が存在しないことから、この時期までには消失したものと考えられる。

小結 牛頸窯跡群における須恵器椀の変遷について概観した結果、ⅢB～ⅣB期（6世紀後半～7世紀中頃）に生産された器種であることが明らかになった。杯Hを主体とする古墳時代的土器様相下において出現・盛行し、高台を有する杯Bや平底の杯Aといった律令的土器様相となる7世紀後葉には完全に払拭される点は興味深い。また、椀は銅鏡といった金属器との関連が指摘されているが、今回は触れることができなかった。金属器だけでなく、朝鮮半島の陶質土器との関連も指摘されることから（藤川1993、寺井2012など）、両者を視野に入れつつ、検討を深めていきたい。

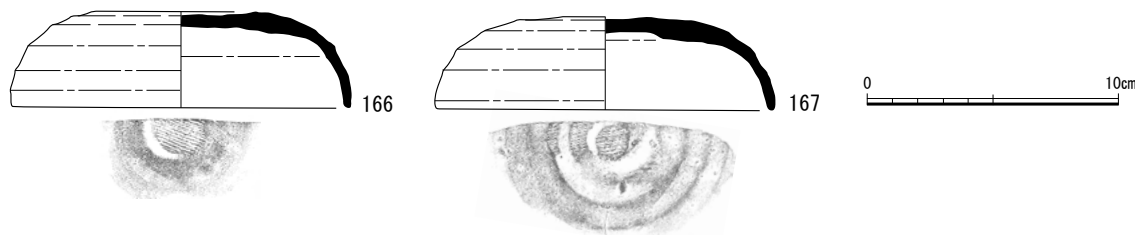
参考文献

- 上田龍児編 2016『乙金地区遺跡群14』大野城市文化財調査報告書第136集 大野城市教育委員会
 上田龍児 2021「牛頸窯跡群の朝鮮半島系資料」『古文化談叢』第87集 九州古文化研究会
 太田 智 2015「須恵器工人集落の研究 序」『古文化談叢』第74集 九州古文化研究会
 寺井 誠 2008「古代難波に運ばれた筑紫の須恵器」『九州考古学』第83号 九州考古学会
 寺井 誠 2012「6・7世紀の北部九州出土朝鮮半島系土器と対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第15回九州前方後円墳研究会
 寺井 誠 2019『渡来文化の故地についての基礎的研究—新羅伽耶を中心として—』大阪歴史博物館
 中島恒次郎 1992「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ 日本中世土器研究会
 藤川智之 1993「古墳時代須恵器椀・台付椀の検討」『真朱』第2号 徳島県埋蔵文化財センター
 山本信夫 1988「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 日本中世土器研究会

V. 附編

1. 野添12号窯跡出土資料の紹介

野添12号窯跡は、昭和61（1986）年に大野城市教育委員会が発掘調査を実施し、翌年に報告書を刊行した。ここでは、未報告であった平行文当て具痕を有する須恵器について報告する。須恵器（166・167） 166・167は杯H蓋である。いずれも復元口径13.4cmを測る。天井部は回転ヘラケズリされ、口縁部は丸くおさめる。内面には平行文当て具痕が残るが、ほとんどが回転ナデ調整によりナデ消されている。いずれもⅢB期に位置付けられる。



第28図 野添12号窯跡出土遺物実測図（1/3）

圖 版



(1) 調査区全景 (北東から)



(2) 調査区俯瞰 (上が北)

図版2



(1) SC01全景 (東から)



(2) SC01南北土層 (西から)



(4) SC01カマド土層 (西から)



(3) SC01貼床南北土層 (西から)



(5) SC01カマド完屈状況 (南東から)



(1) SC02全景 (東から)



(2) SC02東西土層 (南東から)



(4) SC02カマド土層② (南東から)



(3) SC02カマド土層① (南西から)



(5) SC02カマド完屈状況 (東から)

図版4



(1) SC02貼床除去状況 (東から)



(5) SC04南北土層 (西から)



(2) SC03全景 (東から)



(6) SC04カマド土層 (東から)



(3) SC03東西土層 (南から)



(7) SC05全景 (南東から)



(4) SC04全景 (南東から)



(8) SC05土層 (南東から)



(1) SC06全景 (南西から)



(2) SC06東西土層 (南西から)



(4) SC06カマド土層② (南西から)



(3) SC06カマド土層① (南東から)



(5) SC06カマド遺物出土状況① (東から)

図版6



(1) SC06カマド遺物出土状況② (東から)



(5) SK04完掘状況 (南西から)



(2) SC06貼床除去状況 (南西から)



(6) SK04遺物出土状況 (南西から)



(3) SC07全景 (東から)



(7) SK04調査状況 (南東から)



(4) SK01全景 (北西から)



(8) 調査前全景 (北西から)

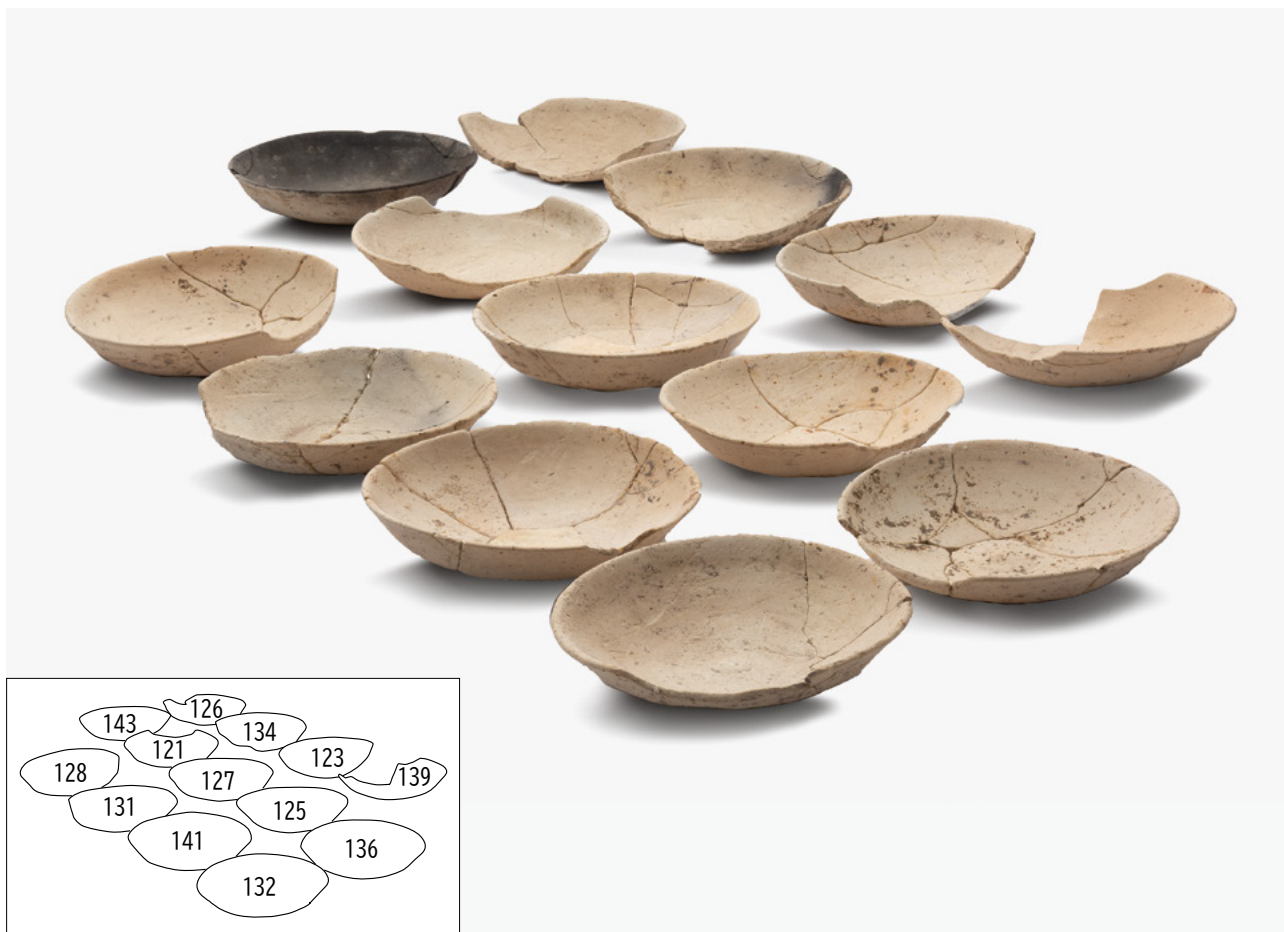


图版 8





图版10



出土遺物④

報告書抄録

ふりがな	かみのそのいせき							
書名	上園遺跡11							
副書名	第17次調査							
巻次	11							
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第205集							
編著者名	山元 瞭平							
編集機関	大野城市							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1 電話 092 (501) 2211							
発行年月日	2023年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
かみのそのいせき 上園遺跡	福岡県大野城市 かみおおり 上大利4丁目118番 1	402192		33° 30' 57"	130° 28' 57"	2022年 1月21日 ～ 2022年 3月30日	160㎡	住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上園遺跡 第17次調査	集落等	古墳・ 平安	竪穴建物・ 土坑・ピット	須恵器・土師器・ 鉄製品・石製品				
要約	調査の結果、古墳時代後期の竪穴建物跡を確認した。須恵器が大量に出土し、焼き歪みや釉着資料が多く含まれることから、付近の窯で生産された須恵器の選別が行われた可能性が考えられる。その他、平安時代後期の土坑を確認し、土師器・黒色土器の良好な一括資料が得られた。							

大野城市文化財調査報告書 第205集

上園遺跡11

令和5年3月31日

発行 大野城市

〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 山口印刷株式会社

〒848-0035 佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5

